



『悟道軒日記帳』 昭和十四年
後半（七月から一二月分） 翻刻と注釈

メタデータ	言語: ja 出版者: 奥野, 久美子 公開日: 2024-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥野, 久美子, 中村, 健, 吉井, 美稀, 武田, 悠希, 高橋, 圭一, 松田, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/0002000876

『悟道軒日記帳』 昭和十四年 後半

(七月から一二月分) 翻刻と注釈

奥野 久美子
中村 健
吉井 美稀
武田 悠希
高橋 圭一
松田 忍

本稿は、大阪公立大学文学研究科が二〇二二年に受贈した、吉沢英明氏旧蔵の演芸資料〈吉沢コレクシヨン〉から、講師・悟道軒圓玉の晩年の日記『悟道軒日記帳』（昭和十四年）を翻刻し注釈を施すものである。前半の一〜六月分は、『吉沢コレクシヨンの世界―『悟道軒日記帳』・資料解題集―』（二〇二三年二月）に収録済みである。今回はその続稿として後半の翻刻と注釈を作成した。なお、本資料の【資料概要】や部分的な画像は前稿に掲載済みである。

【凡例】

- ・旧字は人名を除いて新字に改め、仮名づかいは原則として原文どおりとした。
- ・明らかな誤字は改め、存疑箇所については「ママ」や「」内に説明を付すなどして適宜対応した。
- ・原文にないが意味把握上必要と思われるルビは（ ）に入れて付した。
- ・改行について、詩歌や「〇」印による見出し表示のある改行は本翻刻でも改行した。その他、段落変えを伴う改行は「／」で示し、行末による改行は本翻刻には反映していない。
- ・全角および半角のスペースは、原文に従い、翻刻者が判断した。

・判読不能文字は●で示したが、一定の推測が可能な場合は直後の（ ）内に、例…●（論？）の形で示した。

・原文で削除されている文字は、原則として本翻刻には反映しないが、削除前の文字が明らかに判読でき、単純な誤記修正ではないと判断した場合は、削除部分を一重線で消し、削除に代わる部分に傍線を引いた。

・原文で横から挿入されている文字は、本翻刻では特に挿入であることを示すことなく本文に入れた。

・本日記の上欄には金銭の出納メモがあり、下欄が日記本文となっている。翻刻では、各日ごとに「上欄：」「下欄：」の見出しをつけてそれぞれの記事内容を示した。

【翻刻・注釈】

・七月一日

上欄：半晴／八十銭 うなぎ／三銭 しんぶん／十銭 バス／メ九十三銭
下欄

福日①幕末七剣士②ときまる 自然便／夜 奴③にてウナギ まづい／福日
副社長原田徳次郎氏④ 同社勤務を辞セシヨシ（副社長）／志村家屋⑤ 坂倉所有分
とも合して一万七千五百円にて売却契約成立／二千円手付を受取りし由

（1）福日：五月二十九日記事・注参照。

（2）幕末七剣士：六月十日記事・注参照。「福岡日日新聞」朝刊に、悟道軒圓玉演・中一彌
絵「幕末剣豪伝」が連載された。連載は、八月十四日から十月二十七日まで七十四回、
その後中断を挿んで十一月二十六日に七十五回から再開し、翌昭和十五年三月三十一日
に二百回で終了した。本稿七月記事末尾の補注参照。

（3）奴：浅草の老舗うなぎ屋。四月十二日、五月二十一日などに食事に出かけている。「蛇
骨湯（浅草田原町）のそばの奴うなぎですが、あすこは昔よりありました」（松崎とい
女談「安政夜話（十）」／今昔 昭和七年七月）

（4）原田徳次郎氏：「昭和十五年新聞総覧」（昭和十五年六月二十五日 日本電報通信社編・
発行）に掲載の「福岡日日新聞」の「幹部氏名」欄（三〇一ページ）には、副社長とし

て原田徳次郎の名がある。『著名新聞人を語る』（昭和十一年六月 国勢新聞社）には原田徳次郎の章があり、肩書きは「福岡日日営業局長」、本文中では「広告界に在りては福岡日日の原田氏と言ふよりも原田氏の福岡日日と言はれるほどで氏の広告界に於ける勢力はこの一事を以つてしても窺知出る」とあり、業界では著名人物であった。『西日本新聞社史』（昭和二十六年四月 西日本新聞社）第七篇第八章第4節に「原田副社長の勇退と逝去」の項目があり、原田は昭和十七年六月十七日に七十七歳で任期満了をもって副社長を勇退し、二年後に逝去したとある。「心力を広告業務にささげ、傍ら小説や講談の原稿交渉にたずさわつた」と記されている。

(5) 志村家屋…四月一日に「早川方にて志村の家屋監督なす老女に出会」、六月二十一日に「文三来り志村家屋に住する人の寄留届へ調印を乞ふ」、六月三十日に「鉄次 阪倉同伴にて志村へ出張 是は家屋売却なすにつき 然しウマク売ればおなぐさみ まづは不成功となりなん」とあり、不成功と思われた契約が成立した。後出七月十日記事参照。

・七月二日

上欄…晴／廿五銭 くわし／三十三銭 ケム／メ五十八銭

下欄

田中⁽⁶⁾ 来ル 福日ヲ依頼 自然便／田原や⁽⁷⁾ 来ル 兵古帯註文／泥兄⁽⁸⁾ 来訪 醬油三本おくらる

上等ちらしを馳走する／きんぎよ鉢と金魚を求ム 一円八十銭／夜 早川⁽⁹⁾ にて理髪修繕／川倉氏に遭ふ／川倉細君来訪／夕食 自製 ヤサイサラダ

(6) 田中…二月二十一日記事・注参照。

(7) 田原や…本日記に類出する、出入りの呉服屋。一月十五日等の記事参照。

(8) 泥兄…「泥」はふざけて人物をおとしめる表現。二月十三日記事には「泥的へ返書」の例がある。

(9) 早川…一月一日記事・注参照。次の「川倉氏」とその妻も一月二日以降、本日記に類出する。

・七月三日

上欄…晴／十一銭 入浴／十八銭 タバコ／メ廿九銭

下欄

午前右円⁽¹⁰⁾ 来訪

(10) 右円…講釈師の大島右圓。一月二十六日記事・注参照。

・七月四日

上欄…晴／三十六銭 タバコ／夕食は冷むぎ

下欄

散歩／樫田氏⁽¹¹⁾ 方診察、注射、六月分薬価四十一円十四銭支払にて帰宅／「十時半」家主鈴木⁽¹²⁾ 来りて修繕／夜早川来り二千五百円持来／同時に志村家屋 敷金百二十円ワタス／加藤⁽¹³⁾ 来訪貸し与へし書籍を戻し くわしをおくらる

(11) 樫田氏…かかりつけ医。一月四日記事・注参照。ふだんは圓玉の自宅へ来診することが多いが、圓玉が受診に出かけている。

(12) 鈴木…一月一日以降、本日記に類出する隣家の鈴木氏と同一人物か。「家主」の「鈴木」と表記されるのは初めて。

(13) 加藤…三月九日以降、時折出てくる知人。これまでの記事によれば、加藤は「早川」と親しいようである。

・七月五日

上欄…曇 折々晴 南風 俗に●●(流れ?) ト云ふ／十銭 バス／十七銭 タバコ／二十銭 文三⁽¹⁴⁾／メ四十七銭

下欄

午前東蓄¹⁵へ行き預金と同時に利子ヲウケトル／右田来ル 雑談／文三来り ヒ
ゲソリ／早川来ル

(14) 文三・早川文三。一月三日記事・注参照。

(15) 東蓄・東京貯蓄銀行。明治二十五年、渋沢栄一を中心に設立され、この頃は東京市内に十八の支店があった(『人的／事業大系 銀行篇』中外産業調査会 昭和十四年三月)。浅草区内では駒形二ノ五に浅草支店があった(『東京府管内／銀行職員録』昭和十四年六月改版(第十六版) 銀行職員録発行所)。

・七月六日

上欄・曇 / 五十銭

下欄

午后驟雨／田原やより兵古帯と筒袖届く／持参した小商店 目がわるく尚耳も少々
遠く 実以て気の毒／大化¹⁶は十剣士と確定／美代子心行寺¹⁷参詣／半期付届ケ
ヲワタス

(16) 大化・圓玉が講談を連載していた「大阪化粧品商報」のこと。二月十六日、六月二十二日の記事・注参照。「十剣士」については、六月二十二日記事で「新に武張りしものを掲載」との予定があった。後出七月二十三日記事参照。この時点では、七月一日記事の「福岡日日新聞」の〈幕末七剣士〉と重なる演目を選ぼうとしていたのだろうか。本稿七月記事末尾の補注参照。

(17) 心行寺・現・江東区深川にある浄土宗寺院。圓玉の墓も同寺にある。昭和十三年版の『浄土宗寺院名鑑』(昭和十三年五月、教学週報社)では、所在地は「深川区亀住町五二」。檀家として半期分のお布施(付届ケ)を納めた。

・七月七日

上欄・晴 / 五十銭 / 十一銭 入浴 / メ六十一銭
下欄

美代子夜母のもとへ行く 九時半帰宅／燕雄¹⁸来りて菓子及び田舎まんぢうをたべて帰去 此の人 食物のある内はうごかす¹⁹／

(18) 燕雄・講釈師の桃川燕雄。一月二十一日記事・注参照。

・七月八日

上欄・曇 / 五十銭 子供

下欄

中嶋氏¹⁹妻女来訪 子供ヲツレテ パンをオクラル／安田銀行員野村氏²⁰来訪
くわしをおくらの 美代子 ビールを買ってコレヲモテナス ビールにそへるに鯨

(19) 中嶋氏・本日記の三月二日以降、たびたび妻や夫妻が子連れで訪問している。三月二十六日には「中嶋暴力団来る 二円トラル」と一家を茶化している。

(20) 安田銀行員野村氏・一月十三日記事・注参照。

・七月九日

上欄・半晴 / 十一銭 入浴 / 二十銭 くわし / 二十銭 ヒゲ / メ五十一銭

下欄

来訪者 川倉 文三来りヒゲソリ／早川 中元礼(砂糖)

○夜 明神参詣(鳥越²¹) 今宵は縁日／ブラツキ帰路右田氏に遇ふ／同伴して帰宅

折しも小雨／樫田氏ヨリクスリを取寄る／美代子母中元に来ル

(21) 鳥越：鳥越明神、鳥越神社。現・台東区鳥越にある。三田村鳶魚編『江戸年中行事』(昭和二年一月 春陽堂)所載の「東都遊覧年中行事(嘉永四年版)」には「九日」の欄に「浅草鳥越明神毎月縁日」と記載がある。

・七月十日

上欄：曇／一円 すし／十九銭 タバコ／メ一円十九銭

下欄

美代子隣家老母⁽²²⁾同伴 観世音参詣(月拝)

○早川志村の家屋売却して利益を獲たるを大得意として欣然雀躍大喜び曰ク コンナ事があるから理髪ナゾヲシテヲラレスト まづく目出度しくく／鈴木未亡人娘をつれて訪問／五目を馳走する／夕食 刺身、ナマリ⁽²³⁾／駒井氏⁽²⁴⁾中元礼に来る

(22) 隣家老母：三月二十八日以降たびたび「隣家鈴木氏老母」が出る。こども鈴木氏老母か。一月一日記事にも「美代子鈴木氏妻女と共に観世音月拝」とある。観世音は浅草寺。

(23) ナマリ：なまり節、生り節。鯉を蒸して半乾燥させたもの(小学館『日本国語大辞典』)。勝部彦三郎「鯉節の節と言ふ字に就き」(「水産界」昭和六年四月)では、「「鯉いぶし」が「鯉ぶし」となり、「生いぶし」が「生りぶし」となるのに不思議はない」と、その語源の一説が示されている。

(24) 駒井氏：本日記に頻出する人物。一月五日記事・注参照。

・七月十一日

上欄：薄グモリ／三十銭 タバコ

下欄

美代子へ家計費五十円ワタス／これにて本月分百円トナル／宮坂氏⁽²⁵⁾中元礼 三社中元
○午睡ヨリ目ざまし 何か嚙下シタヨウナレド不明 終日鼓腸／夕食 鰯煮つけに汁

(25) 宮坂氏：二月二日、六月七日に既出。

・七月十二日

上欄：晴／二十銭 ヒゲソリ／五十銭 ウナギ／三十六銭 タバコ／メ一円〇六銭

下欄

奸妹⁽²⁶⁾来ル 中元 鶏卵をオクルル／その返礼として三円与フ／早川来り実印を戻す 中元として七円与ふ／夜 兵藤 中元礼／月賦金十円持参／夕食 ウナギに松魚刺身

(26) 奸妹：六月二十五日に既出。

・七月十三日

上欄：晴又細雨 夜軽雷頗ル蒸暑ク難渋／十一銭 入浴／四十八銭 タバコ／メ五

十九銭

下欄

午前田中中元^(一円下子供に五十銭)与ふ／砂糖及び船橋や⁽²⁷⁾の葛餅をおくらる

○氷⁽²⁸⁾本日ヨリ入レル ○安田行員松本氏来訪／美代子ケイコかたぐ中元礼

○金子氏⁽²⁹⁾ヨリ中元の礼として醤油ヲオクルル

○平山老母中元礼 如例二円

○若林アキラ⁽³⁰⁾トカ言^(いふ) へん人來ル 雑談

○夕食自製野菜サラダ及び雀焼⁽³¹⁾

(27) 船橋屋…江東区亀戸に本店がある老舗菓子店。『大東京年誌附録 人物編』(社会教育研究所 昭和七年五月)には「船橋屋くづもち店主」として「渡邊章子嬢」が載り、「亀戸名物としてその昔より風流人に知らる、船橋屋の葛餅―此の店は実に文化二年頃の創業に係る歴史的老舗で、当主はその六代目に当る」とある。芥川龍之介「本所兩國」(昭和二年五月)には「僕等は「天神様」の外へ出た後、「船橋屋」の葛餅を食ふ相談をした。」「しかし僕の中学時代には葛餅も一盆三銭だった。僕は僕の友だちと一しよに江東梅園などへ遠足に行つた帰りに度々この葛餅を食つたものである。」などがある。

(28) 水…上部に氷を入れて中を冷やす水冷蔵庫のことか。

(29) 金子氏…六月三日に子息を伴つて来訪している。

(30) 若林アキラ…師の伯圓の本名が若林であることと関係があるか。

(31) 雀焼…「小鮒や小魚をすずめ開きにして串を打ち、照り焼きにしたもの」(『日本国語大辞典』小学館)、ジャパンナレッジ版 二〇二四年一月三〇日閲覧)。元日の記事にもおせち料理の一つに「鮒雀焼」とある。

・七月十四日

上欄…曇／五十銭 タバコ／二十二銭 入浴／メ七十二銭

下欄

湿気ヲフクミ蒸暑く大難波／来訪者右田氏午後二時頃ヨリ夕方マデ雑談 二人打揃フテ入浴／大阪夏冬戦争の図⁽³²⁾をおくらす

◎夜早川へ行く 納涼／駒井氏橋本氏⁽³³⁾二遭ふ

(32) 大阪夏冬戦争の図…講談のネタにも多い大坂冬の陣・夏の陣の陣図。

(33) 橋本氏…二月十七日、六月二十五日記事などで、圓玉は「橋本氏」から診察・投薬を受けており、七月二十四日記事にも「橋本医師」とある。

・七月十五日

上欄…晴天 暑い／三十三銭 タバコ／大化と南陵氏⁽³⁴⁾へ

下欄

内外通信⁽³⁵⁾へ原稿發送 是は例月の分

○感冒の気味

天津英租界に関する協議⁽³⁶⁾ 本日ヨリ東京ニテ會催^(やむ)、仏が出るか将又鬼が出るか

／夕食あいなめ煮付ケ 平目の子／新づけ香の物

(34) 大化と南陵氏…大化は先掲七月六日記事・注参照。南陵氏は上方講談師の二代目旭堂南陵(明治一〇(一八七七)年〜昭和四〇(一九六五)年)か。

(35) 内外通信…二月三日記事・注参照。同注にあるとおり、八月二十三日記事で内外通信が「蒙疆新聞」への原稿を仲介している。

(36) 天津英租界に関する協議…天津租界をめぐる日英会談のこと。七月十五日付「東京朝日新聞」夕刊一面には「英国大使に正式通告 必ず愈々日英会談へ」との見出しで記事があり、十四日に外相秘書官がクレギー駐日英大使を訪問し、十五日午前には有田外相と同大使の会見をもつて「天津租界問題に関する日英東京会談を開催したい旨正式申入れをなした」とある。天津租界封鎖事件は、「日中戦争中に、中国華北地方を占領中の日本軍が天津市内のイギリス・フランス両租界に対して嚴重な交通制限を実施し、事実上の封鎖状態においた事件。〔中略〕事件の直接のきっかけは、イギリス租界内で検挙された抗日テロ事件の被疑者の引渡しをイギリス政府が拒否したことにあつたが、日本側の狙いは、日本の占領地支配に非協力的なイギリス政府を窮地に陥れ、その東アジア政策を、「対中」好意的中立から全面的対日協力へと大きく転向させるところにあつた。事件解決のため東京で開かれた日英会談において、日本側ははじめイギリスに迫つて一定の譲歩(有田・クレギー協定)を獲得したが、逆にアメリカの態度硬化、日米通商条約の廃棄通告という重大な結果を招いてしまった。結局、日英会談も決裂、解決のめど立たぬまま封鎖は続行された。〔国史大辞典〕(吉川弘文館、ジャパンナレッジ版 二〇二四年一月三〇日閲覧)より「天津租界封鎖事件」の項、永井和氏執筆)

・七月十六日

上欄：十一銭 入浴

下欄

榎田氏ヨリ葉ヲ呼ブ〔「扱ブ」とも読めるか〕111 112 110 三種（五日分）／田中へ手紙ヲ発ス

○午后ラジヲ³⁷ 故人三人、他に映画ノ説明者³⁸ 三人 大昔ノ映画ヲ偲ブ

髻剃／榎田氏来診 第二注射／夕食 鯛の塩焼 冷奴／川倉氏来訪 雑談 薄暮帰去

(37) ラジヲ：同日「東京朝日新聞」朝刊九面ラジヲ欄によれば、東京放送局の午後は、一時

より「思出の声（レコード）」という番組で、浪花節の宮川左近（三代目か）、落語の三升家小勝（五代目か）など故人の芸をレコードで流したようである。ただし、演目は三つ（故人三人）ではなく謡曲、長唄、西洋音楽等も含めて七つとなっている。続けて一時三十分より「思出の名画大会」という番組があり、喜劇「新馬鹿大将消防の巻」や「幌馬車」など五つの映画題名が挙がっている。

(38) 説明者：活動弁士のこと。前注のラジヲ番組「思出の名画大会」の活動弁士名は加藤清眼、泉天嶺、石井春波、玉井旭洋、柴井三郎、丸山章治とある。泉以下五名の名は、片岡一郎『活動写真真弁士 映画に魂を吹き込む人びと』（二〇二〇年一〇月 株式会社共和国）に戦前の活動写真真弁士として掲載がある。

・七月十七日

上欄：晴／四十八銭 タバコ／五十銭 黙酔会³⁹

下欄

黙酔課題 瀧、虹、袴能⁴⁰ 席題⁴¹ 金魚／美代子 ケイコ／午前二時頃小嶋町
出火⁴² 四五軒消失／昨十六日午後二時西北の空にて果然たる音響あり コレハ
雷鳴（晴天のヘキレキ）雨少々雷鳴 三時半頃ヤム／夕食

(39) 黙酔会：句会。一月十七日記事・注参照。同日記事にも「五十銭 モクスイ」とあり、参加費であろう。下欄の「課題」は句会のため用意された句題と思われる。

(40) 袴能：面や装束をつけずに、紋服に袴だけを着用して演じる能。暑中に行なわれることが多く、夏の季語（『日本国語大辞典』小学館、ジャパンナレッジ版を参照。二〇二四年一月三〇日閲覧）。

(41) 席題：句会でその場で出す即興の句題。

(42) 出火：『東京朝日新聞』七月十七日朝刊十一面には「火事」の見出しで浅草、芝、大井の三件の火事の記事がある。うち浅草は十七日午前一時十六分、浅草区北三筋町の鮎屋から出火し隣接三棟四戸を全半焼したとある。翌年発行の地図『大東京区分図三十五区之内浅草区詳細図』（東京地形社 昭和十五年六月）によれば、小島町（本日記表記は「小嶋町」と北三筋町は隣接していたため、圓玉が北三筋町の火事を小島町の火事と認識したのであろう）。

・七月十八日

上欄：晴／十一銭 入浴

下欄

本日ヨリ防空演習⁴³ 廿二日午前六時三十分マデ執行／夕食 すゞき塩焼／絹ごし豆腐

(43) 防空演習：七月十八日「東京朝日新聞」夕刊二面に「防空演習あす開幕」の記事があり、本年度第二次防空演習が明十八日から五日間、東京、神奈川などで行われるとある。同三面には、「浅草は平常通り 防空演習中の興行街」との記事もあり、東京の主要な興行のうち、休場する劇場と時間変更をして開場する劇場などを示している。防空演習については、十月二十四日記事の注に詳しい。

・七月十九日

上欄：二円八十七銭

下欄

午前小嶋氏⁽⁴⁴⁾訪問帰路松坂屋⁽⁴⁵⁾にて買物 帰宅十一時／小嶋氏右足を挫傷 目下加養中／令嬢は伊勢丹⁽⁴⁶⁾へ勤務との事 子息はもはや尋常六年生 めでたしく
○松坂屋にて鮭の燻製とまづき大阪ずしを求めて帰宅 あつい事／夕食 鮪さしみ 自製ヤサイサラダ

(44) 小嶋氏…一月二日以降、時折来訪する人物。三月三十一日記事には「白衣の勇士小嶋来ル」とある。

(45) 松坂屋…松坂屋。名古屋に本店を置く百貨店。「大松坂屋の全貌上巻 松坂屋名古屋店」(百貨店日日新聞社 昭和十二年五月)によれば、東京支店は上野店が嘉永四年、銀座店が大正十三年に開店。

(46) 伊勢丹…昭和拾四年版『日本百貨店総覧』(百貨店新聞社 昭和十四年五月)の「日本百貨店組合(その三) 東京支部」の記載によれば、伊勢丹は明治十九年創業、百貨店開店は大正五年。本店は四谷区新宿にある。

・七月二十日

上欄…半晴／二十六銭 タバコ／十一銭 入浴

下欄

防空演習／午後二時頃軽雷驟雨忽ち歇ム／暑い／気温は三十三度に昇りし由
(午後一時)／二、三四日来訪者ナシ／夕食 鰯煮付ケ 豆腐ノ清汁

・七月二十一日

上欄…半晴／廿銭 パン／十一銭 入浴

下欄

風間幸子女史⁽⁴⁷⁾来ル 全身鳶色ヲナシ南洋産ノ如シ／コレハ明川小学校⁽⁴⁸⁾の女生

徒家事向見習のため夏季休暇中 各家屋へ出張するよし

○大村令邦⁽⁴⁹⁾氏来ル アメをおくらる／夕食 自製カレーライス

(47) 女史…ここでは小学校の女生徒に「女史」とつけているので、からかいの意。

(48) 明川小学校…深川区にあった小学校。「大東京区分図三十五区之内深川区詳細図」(昭和十六年五月 日本統制地図)では、深川区平野町三丁目に学校の地図記号があり、「明川小学」とある。

(49) 大村令邦…画家。「洋画先覚本多錦吉郎」(昭和九年九月 本多錦吉郎翁建碑会)に、弟子として文章を寄せている。同書巻末名簿によれば、昭和九年当時は日本橋通町に在住。挿画、装丁を多く手がけていたようである。

・七月二十二日

上欄…クモリ又は晴(あるひは雨)

下欄

午前檜田氏方診察 葉111 112 三種(五日分)ヲウケ帰宅 途中ヨリ細雨 終日小雨又は晴 愈々あつく閉口／中嶋氏妻女小児同伴にて来訪／アンコロをおくらる ○帰路美代子同道にて買物／美代子母子へ十五円与ふ／夕食 自製オムレツ

・七月二十三日

上欄…曇折々雨又ハ晴／五十銭 スシ

下欄

右田氏来訪 例の雑談／大阪化粧品西村氏来訪 原稿の事／幕末十剣士ヲ十八烈士⁽⁵⁰⁾と訂正／美代子公休日／夕食 五もくすし(三人)

(50) 大阪化粧品西村氏…十八烈士…七月六日記事・注参照。「十八烈士」は桜田門外の変を

起こした水戸浪士ら十八名を題材にした演目か。明治四十三年に高橋筑峰による史談『十八烈士桜田快拳録』（春江堂）が出版されている。桜田門外の変を題材にした実録は「桜田血染の雪」（菊亭静 編著）が知られており、講談も数多い。吉沢英明『講談作品事典』（中）の「虎屋定兵衛」（桜田騷動もの）の項目には、「桃川燕玉、真龍齋貞水、神田伯龍に「桜田騷動」、田辺南鶴に「水戸浪士伝」があり全て明治期の刊本」とある。

・七月二十四日

上欄…曇折々晴 涼し／卅六銭 タバコ／十一銭 入浴／メ四十七銭

下欄

田原や来ル 支払「十六円四十銭」／加藤来訪／曾て天津へ軍属トシテ就職セシ篠村新太郎氏⁵¹ヨリ書状来ル 直ニ返書ヲ発ス／下剤ヲ服セシガ便通ナシ／夕食マダ口刺身 冷奴／橋本医師へ薬価及び菓子ヲオクル

(51) 篠村新太郎氏…六月十九日記事に「篠村新太郎来ル 軍属として天津へ出張するよし」とある。後出の本日記巻末メモ欄の六頁にも名前と所属が記載されている。

・七月二十五日

上欄…一円也いろく／十一銭 入浴／メ一円十一銭

下欄

美代子縁日にて朝顔一鉢を求む／田中福日の原稿料持参（三十席分）／筆墨代二十六円与フ／蕎麦トツテ馳走／田中福日の原稿料薄きに不満の様子／夜ソレについて書状を発ス

○早川来ル 浅黄ニ白くボツ／円ヲぬきし浴衣さながら馬鹿ばやし⁵²の親方の如クイキデナク 上品でなくヤボ一方／夕食自製サラダトどぜうなべ

(52) 馬鹿ばやし…「江戸時代から、東京とその周辺で行なわれる祭礼で、山車の上ではやされる囃子。」「おかめ、ひよっこなどの面をつけた馬鹿踊りがつくところからの称という。」（『日本国語大辞典』小学館、ジャパナレッジ版より 二〇二四年一月三〇日閲覧）

・七月二十六日

上欄…晴／五十銭 寺／十銭 コドモ／二十銭 ハガキ／夜に入り一層あつし

下欄

午前十時頃伯知氏展墓⁵³ 帰路早川へ立寄り帰宅／幸子 早帰り（下部にもやや小さい字で「幸子さん早帰り」とある。清書時の重複か）／駒井氏来訪／扇橋氏⁵⁴暑中の礼として来訪／一円うばはれる／夕食さしみ、玉子、佃煮

(53) 伯知氏展墓…松林伯知（猫遊軒伯知）は昭和七年三月六日死去。葬儀は浅草区鳥越（現・台東区鳥越）にある信入院で行われ、墓も同所に現存する。（『読売新聞』昭和七年三月七日夕刊「伯知老死去」記事、神田真紅師ご教示）

(54) 扇橋氏…落語家の入船亭扇橋（八代）。一月二日記事に既出。

・七月二十七日

上欄…晴 折々曇／四十七銭 タバコ／十一銭 入浴／廿五銭 クスリ

下欄

入浴 夜クスリヲ求ム／今日は殆ど一日睡眠／来訪者ナシ／夕食 冷奴 カツレツ

・七月二十八日

上欄：晴／三十六銭 タバコ／十二銭 入浴
下欄

下剤服用 再三軟便／カシダ氏ヨリ クスリヲオクルル111 112 三日分ツツ／暑い
く／五十円 美代子へ／来客ナシ／夕食 鱸の塩焼 枝豆

・七月二十九日

上欄：晴／三十六銭 タバコ／五十銭 クスリとヒゲ

下欄

御令嬢 映画見物シヤナリくとお出でになる 八時帰宅

○入浴／夕食 さしみ 佃煮

・七月三十日

上欄：晴／三十銭 タバコ／八十五銭 ウナギとバス／メ一円十五銭

下欄

駒井氏洗張羽折持参(六十五銭)／頗る暑し／樫田氏ヨリ薬価請求書着／二十二円

〔約二字分空欄「ママ」銭〕

○午後六時頃 奴行き食事／日曜とて大入満員 隣席の女二十一才肥肉なれど目
立ず顔も好し 立派な女ナリ／夕食 奴のウナギに蒲焼／夜 快晴

・七月三十一日

上欄：晴／メ十九円四十八銭

下欄

安田行員松本氏来訪 雑談

○気分不快○

日英会談⁵⁵ 本日延期／午後八時ヨリ約二時間に亘り豪雨迅雷／江東方面浸水⁵⁶ 及び落雷廿七ヶ所／拙宅の土間及び庭へも出水／悪寒発熱、燕雄来り不相変ムシヤリ
く(コレハ物たべる事)／夕食 冷麦、コチの煮付 其他いか ヤキ豆腐

(55) 日英会談…「東京朝日新聞」七月二十九日記事「現銀の引渡し問題で 日英意見俄然対立す」によれば、第六次の日英会談が七月三十一日午前に開かれる予定であった。八月一日同紙記事「英側から最後の切り札 金融専門家の討議要求」によれば、実際に第六次会談が開かれたのは七月三十一日午後四時十分であった。

(56) 江東方面浸水…「東京朝日新聞」八月一日朝刊十二面に詳報がある。「記録破りの豪雨 雷・帝都に狂乱 二十余ヶ所に火災」の見出しで、三十一日午後八時過ぎから約二時間にわたり、帝都始め関東地方一帯に「猛烈な雷雨の急襲」があり、「太平洋をぶちまけた様な豪雨」だったとある。「浸水二万余戸」「落雷の被害 江東方面甚大」などの小見出しで、落雷による火災被害などを伝えている。

【圓玉日記七月分補注】

七月一日注(2)「幕末剣豪伝」(「福岡日日新聞」連載)について、詳細を補足する。

「幕末剣豪伝」は、千葉周作から近藤勇までの七人の剣士を取り上げたもの。連載開始前の同紙八月十日付夕刊第二面に予告があり、「作者の言葉」「画家の言葉」がそれぞれ顔写真つきで掲載されている。その中で圓玉は「この一篇は、圓玉まだ若年の頃、師匠松林伯圓のお供をして諸国を巡歴致しました節、幕末を舞台として活躍した幾多の剣豪、剣客の墓石に詣で、その遺族、知人を訪れて故人の武勇伝、逸話などを聞き、それらを総合して物語としたもので、申さば七剣士の事実談であります。」と、「七剣士」ものを予告している。七月一日記事ではこの演目が「幕末七剣士」と、やや異なる題名で書かれているが、内容は同じものを指していたのだ

ろう。「聖戦二周年を迎へまして」「皇軍勇士の方々が」「降魔の正剣をふるつてをられる秋」など、時局に配慮した言葉もある。この点は六月二十二日記事および同注にあるように、別の連載でも「武張りしもの」が求められており、演目選定にも時局が反映されている。

「福日」紙での本連載の前の講談連載は旭堂南陵演・葛岡年定絵「毛谷村六助」で、八月十三日に二百七十四回で完結した。

本連載の構成と掲載日は以下のとおり。各パートの一席目と最終席を列挙する。

・八月十四日「幕末剣豪伝(1)」千葉周作 第一席 北辰一刀流
・九月十日「幕末剣豪伝(28)」千葉周作 第廿八席 よき訓戒 *ここまでで千葉周作の回は終了。29回目より島田見山に移るが、紙上の見出しと席数が誤記され、九月十五日まで「千葉周作」の見出しのまま。九月十六日に訂正記事が入り、同日が「島田見山」第六席となる。

・九月十六日「幕末剣豪伝(34)」島田見山 第六席 そばの研究

・十月二十七日「幕末剣豪伝(74)」島田見山 第四十六席 鳶と馬 *末尾には「了」。このあと約一か月中断。本日記十一月五日記事に「福日去月廿七日以後講談掲載セズ」依て田中をしてその理由を支局に問ひ合す」とある。

・十一月二十六日「幕末剣豪伝(75)」上田馬之助 第一席 極意 *本日記十一月二十八日記事には「福日本日ヨリ又掲載(上田馬之助)」とある。

・十二月二十一日「幕末剣豪伝(100)」上田馬之助 第廿六席 時勢の推移

・十二月二十二日「幕末剣豪伝(101)」里見静枝 第一席 下馬評

・昭和十五年一月二十三日「幕末剣豪伝(132)」里見静枝 第卅五席 本懐

・一月二十四日「幕末剣豪伝(133)」秋山要助と逸見多四郎 第一席 父の死去

(一)

・三月七日「幕末剣豪伝(176)」秋山要助と逸見多四郎 第四十四席 意味あり気の菓子折

・三月八日「幕末剣豪伝(177)」近藤勇 第一席 凡人ではない

・三月三十一日「幕末剣豪伝(200)」近藤勇 第二十四席 勇の最期 *文末に

「(完)」。

なお、この後の講談連載は四月一日より旭堂南陵演・野口昴明絵「忠勇義胆／相馬大作」。また、連載中の昭和十五年一月十三日に圓玉は死去するが、「福日」では、一月十七日(26回目)の連載の末尾に付記があり、「愛読の方々へ 演者悟道軒圓玉氏は十三日逝去されましたが この講談は演了して画家中氏の許に●(遺? 活字不鮮明) つてみましたので終末まで続いて掲載致します」とある。この日から連載終了日まで、演者名「悟道軒圓玉」の上には「故」が付される。実際に、七月二日記事に「田中 来ル 福日ヲ依頼」とあり、それ以降もたびたび言及があるように、この連載の執筆は「田中」に任せていたので、支障なかったわけである。

吉沢英明『講談作品事典』(下・一三五五頁)に「幕末剣豪伝」が載り、冒頭の一節が引かれているほか「千葉周作他。円玉は既に「幕末十剣士」を(国民新聞)や大阪(南海日日新聞)等に連載している。」とある。大阪公立大学吉沢コレクシヨンには、昭和四年三月十一日から「南海日日新聞」(大阪府堺市で、大正四年創刊)に圓玉が連載した「幕末十剣士」全二七二席の切抜き冊子(全六冊。連載最終日は、切抜きに日付部分がないため他の記事からの推定で昭和五年六月十九日か)が存在し、また、浪上儀三郎名義の『幕末剣豪／十士の活躍裏面史』(昭和四年三月郁文舎出版部・上下巻)の下巻もある(いずれも近藤紫雲画)。後者には吉沢氏の筆跡かどうか不明だが「幕末十剣士」を改題出版したもの」という別紙メモが付されている。

これらの中で取り上げられていることが確認できるのは、秋山要介(逸見多四郎の話を含む)、櫻井五助、里見静枝、千葉周作、平手造酒武虎、佐々木見山、上田馬之助、拳骨和尚(武田)物外、近藤勇。

・八月一日

上欄…半晴／五十銭

下欄

昨夜の落雷 二十七ヶ所⁽¹⁾人畜には被害なし／鈴木氏来訪 蕎麦を馳走 午後二時帰去／川倉妻女来りせんべつヲオクル

○山根氏ヨリ葉書 返書ヲ発す／夕刻中嶋氏細君子供同伴にて来訪

○体温七度又は六度八分位

夕食ウナギ、サシミ、タマゴヤキ吸物／但シ吸物は豆腐の清汁／拙者、美代子、幸子、文三四人会食／食欲減退

(1) 昨夜の落雷 二十七ヶ所…「猛雷雨！帝都を急襲」『読売新聞』一九三九年八月一日付七面の記事あり。

・八月二日

上欄…曇又晴／三十銭佃煮

下欄

午前中明川小学校職業指導部教員中尾氏来訪 幸子の事をきく⁽²⁾

○笹塚の小林栄氏ヨリ山形産李及び佐渡細工の笊⁽³⁾をおくらす。

○早川妻女病気見舞に来ル／夜早川つれて 納涼／川倉氏同道にて帰宅／夕食半ペシ 蝶(カレイ)／講談落語トモノノ平凡ナルニハビツクリ話術ノウマミは更にな

(2) 幸子の事をきく…七月二十一日、八月六日に記載あり。

(3) 佐渡細工の笊…佐渡は竹細工が盛んであった。ざる。

・八月三日

上欄…クモリ又ハアメ 昼ハ雷鳴さてもにぎやかな天気なり／十銭 マメ／二十銭

座やく／メ三十銭

下欄

放送局ヨリノツマラヌ問合ニ拠(よんどころ)ナク回答シタ／蒙疆新聞社⁽⁴⁾代理 山根氏ヨリ五十席分送付(五十席)／原稿料来ル／夕食 生ざけ いりどうふ

(4) 蒙疆新聞社…蒙疆新聞社は蒙疆における報道・通信の統制機関として一九三八年に設立された(長谷川怜「蒙疆地域における教育の展開と目指された成果…東亜同文書院の大旅行調査報告書から」『同文書院記念報』二九、二〇二一年)。なお、日記翻刻二月三日の注(2)に「圓玉はこの通信社を通じて八月二十三日に『蒙疆新聞』に原稿を送っている」とあるが、送付した原稿の作品名は不明。国立国会図書館所蔵の『蒙疆新聞』一九三九年七月八月には、圓玉名義の連載見当たらず。

・八月四日

上欄…雨／雷鳴むしあつく気分不快／一円八銭 くすり／七十銭 アンマ／メ一円

七十八銭

下欄

美代子投葉ヲ求メル甚ダ冗ナリ／下剤服用／山根氏へ受取証を發ス／大化十剣士は幕末十八烈士と改題⁽⁵⁾／夕食 サシミ いりどうふ

(5) 大化十剣士は幕末十八烈士と改題…日記六月二十二日注四三及び七月二十三日に記載あり。

・八月五日

上欄…大雨／四十七銭タバコ／一円スシ／メ一円四十七銭

下欄

午後三時及び七時便通（郵便局ヨリ百円受取る）／午後森田氏来訪パンヲオクラル
／上等五モクヲ馳走 午後七時半帰去／夕食すし（五もく）

・八月六日

上欄：半晴 四十七銭タバコ

下欄

愚兄来訪 レモンヲおくらる／冷麦ヲ出シテモテナス／午後三時帰去／幸子女史ひ
まさへあれば睡眠／コレデハ家事向の講習ニハナラズ却テなまけ者となる（幸子女
史を鶯色式部と言フ、皮膚の色によりて）／夕食 ナマリ掛ケ醤油 焼豆腐 いか
の煮付ケ 正二是 居酒屋の献立

・八月七日

上欄：晴テ南風／三十銭タバコ

下欄

午前十時新聞解剖^⑥へ原稿発送／田中来り河北稿料（六十席）^⑦マデ持参三十円
トル午後一時帰去

○夜早川へ行き志村家屋売却してその利潤を壘断せしにつき詰問兎角是等の人は金
銭を見ると羞恥心麻痺シテ不義漢となる／夕食 どじょう丸煮いかと焼豆腐

(6) 新聞解剖：東京堂編『出版年鑑』昭和十四年版（東京堂、一九三九年）の「特殊雑誌目
録」によると新聞解剖社（大森区田園調布）の月刊の定期刊行物。昭和九年十一月創
刊。安田精宏編集。四六判。なお圓玉が送った原稿名は不明。

(7) 河北稿料（六十席）：六月二十六日注四七参照。連載は「大岡政談後藤半四郎」（画：茅
場哲雄）『河北新報』一九三九年六月四日～十二月二十二日、一七〇回。

・八月八日

上欄：晴／五十銭リハツ

下欄

本日立秋／午前郵便局ヨリ川合氏おくりし稿料（四十五円）^⑧領収、ソレヨリ早川
方理髪／美代子ニ小づかいとして十円与ふ
虫売りや秋を荷つて町を行く

夕食 香魚^⑨ 塩焼

(8) 川合氏おくりし稿料（四十五円）：五月十八日注の満州日日新聞の「遠山左衛門尉」の
原稿料の事か？ なお、「満州日日新聞」の連載については、四月二十二日・五月十八
日・五月十九日の項に記載あり。人名について、川合・川倉の記載が混在するが、川合
氏が正しいと見える。

(9) 香魚：こうぎよ。鮎の異名。

・八月九日

上欄：曇午後三時ヨリ小雨／三十六銭タバコ／三十銭くわし

下欄

美代子鶯色女史同行にて映画ニュース見物（十時）に出て正午に帰る約束なれど例
の如き横着ぶりを發揮して午後二時半帰宅／早川来ルナンノワケカ二百五十円持
参、依て郵便局に預金、此の金の性質は不明

○文三来りヒゲソリ／夕食まづき鯖の照焼 煎玉子

・八月十日

上欄：晴／三十銭タバコ

下欄

来客ナシ／夕食 茗荷清汁 セイゴ塩焼

・八月十一日

上欄：晴／四十銭／十一銭 入浴／二十銭不明／十八銭タバコ／一円五十銭ヤツコ
／四十銭ウエキ／メ二百九十九銭

下欄

松坂屋買物 ウマニ浜納豆／川倉氏細女来ル／幸子女史たべては寝くはづかしげ
もなく鳶色の皮膚をあらはしその不行儀驚くべし／午食ハヒヤムギ川倉氏細女も共
に／夕食 奴 文三同伴／美代子縁日にて朝顔と夕顔¹⁰ヲ求ム／六十銭

(10) 朝顔と夕顔：朝顔は江戸時代に園芸の広がりとともに朝顔も様々な変化朝顔が作られた。

明治には入谷の朝顔市が始まった。「朝顔」の項『日本史大事典』平凡社一九九二年、

『江戸の実用書 ペット・園芸・暮らしの本』ペリカン社、二〇一三年

・八月十二日

上欄：晴 夜ハクモリ／三十六銭タバコ

下欄

暑気猛烈 三十度／午後二時頃細雨／近隣の住人嬰兒終夜啼きつゞけそれが為に安
眠ならず

○幸子女史早帰り／夕食牛肉ソボロ半ペンケ焼

・八月十三日

上欄：美日／二十銭 くわし／六十銭／二円／メ二円八十銭也

下欄

下劑ニヨル便通(午前一時半)川倉氏同伴本日午前中深川森下街の鍼医に治療を乞
はんと同氏の来訪を待受けしが不来、察するに急用突発せん矣 十一時来訪直二鍼
医に行く／文楽座人形(明治座)本日ヨリ十六日マデのプログラム¹¹に二十四
孝¹²アリ、コレヲ見テ美代子直に入場切符を求メントス遊樂には頗る敏捷なり／
夕食 サシミ イリドウフ

(11) 文楽座人形(明治座)本日ヨリ十六日マデのプログラム：大阪文楽座人形浄瑠璃芝居全
員引越興行。第四回外題は「武田信玄上杉謙信本朝二十四孝 桔梗ヶ原より狐火の段ま
で」傾城反魂香「壺坂観音霊驗記」。(浜町明治座の広告)『読売新聞』一九三九年八
月十三日付六面)

(12) 二十四孝：「本朝二十四孝」のこと。「浄瑠璃。時代物。五段。近松半二・三好松洛・竹
田田幡・竹本三郎兵衛ら合作。明和三年(一七六六)大坂竹本座初演。上杉・武田両家
の争いを題材とし、「信州川中島合戦」など先行諸作品の影響を受けて成立。三段目の
切「勘助住家」、四段目の切「十種香(じしゅこう)」「狐火」などが有名。」「本朝二十
四孝」の項『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇一三年一月二二日最終閲
覧)

・八月十四日

上欄：晴／十一銭入浴／三十銭タバコ

下欄

兵藤¹³来り十四月賦

○みよこ母堂見舞

「夕食 精進揚」

(13) 兵藤…兵藤正清のこと。八月十六日、十二月三十一日後、余白※一頁にも出て来る。

・八月十五日

上欄…晴／午後三時頃ヨリ雷鳴驟雨／三十銭ヒゲ／二十銭座薬

下欄

樫田氏来診 第一注射 五円オクル／今夜の放送河東節邯鄲^⑭近來以（もつて）の聴もの江戸の昔を偲び面白し／美代子実家へ行く／夕食松魚（カツオ）塩焼蒲鉾

(14) 今夜の放送河東節邯鄲…都市放送（八七〇KC）午後八時四十分からのプログラムに河東節「邯鄲」（浄瑠璃）あり（『東京朝日新聞』一九三九年八月十五日付九面ラヂオ欄）。河東節（かとうぶし）は江戸浄瑠璃の流派の一つ。享保二年（一七一七）、十寸見河東（ますみかとう）が江戸半太夫の門から分かれて語り始めた、派手で明るい江戸風の音曲。細棹（ほそざお）の三味線を使用。通人芸となり、今は古曲の一流派。河東浄瑠璃。河東。「河東節」の項『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇二三年十二月二十二日最終閲覧。「邯鄲」は、天保十一年十一月、七代目の河東の十七回忌追善に山彦紫存（九代目河東）が節付けし、都一閑斎（初代宇治紫文斎）と掛合で演奏した（「邯鄲」中内蝶二、田村西男編『日本音曲全集』日本音曲全集刊行会、一九二七年）。

・八月十六日

上欄…晴

下欄

午前美代子母の病気につき実家へ行く

○下剤ニヨル便通

樫田氏の忠告により下剤薬センナ^⑮の服用を禁止、習慣ニナルト医師も頗る治療に困難スルヨシ／正清来ル／右円氏来訪 焼唐辛子ヲオクルル／夕食 失念

(15) 下剤薬センナ…漢方薬。

・八月十七日

上欄…美日／五十銭 タバコ

下欄

美代子実家へ行く／来訪者ナシ／鳶色女史五もくの内、チクワ、シイタケ、カンピョウ、などを不食妙な女なり／亡児四郎^⑯の古き日記ヲヨム（昭和三年ヨリ昭和四年三月にかゝるもの 同月六日死去）／夕食 五もくずし まづい／一体暑き時にすしやそばはうまみなし

(16) 亡児四郎…圓玉の養子。川口松太郎と親しく川口の「風流悟道軒」（『風流悟道軒』桃源社、一九五二年のち『川口松太郎全集十四卷』講談社、一九六八年）にも出て来る。

・八月十八日

上欄…雷 驟雨雷鳴／一円也／前日は蒸暑く午後三時半ヨリ折々驟雨夜も同断

下欄

福岡日日新聞（十六日付）の新聞到着（幕末剣豪伝）第三席／田中ヨリハガキヘンジラダス／（下剤ニヨル便通）黒鷲女史欠勤 デンワニテ歯痛重く依テ不参する
○消防頭坂口萬治郎本日午前十一時蔵前出火^⑰に出勤負傷明治病院へ送られ、○時五十前死去行年七十一／夕食コチ煮付玉子焼半ペン文三来り会食／本日は亡姉み

き五十八年命日茶飯ヲ炊キ仏前に供へ哀悼の意を表す

(17) 蔵前出火ニ「火事【蔵前】」『読売新聞』一九三九年八月一九日付夕刊一面によると、玩具商全焼、隣家二戸半焼の火事であった。

・八月十九日

上欄：雨加え驟雨／五十銭ドジョウ／三十銭タバコ／メ八十銭

下欄

来客ナシ／樫田氏来診第二／夕食どじょうめし まづいゝ

・八月二十日

上欄：雨 十一銭入浴／五十銭ウシ／十銭コドモ／三十銭ヒゲ／メ一円十銭／十七円三十六銭

下欄

川倉氏来訪／下剤ニヨル便通／午後三時入浴／早川方ヒゲソリ／夕食牛肉スキヤキ

・八月二十一日

上欄：曇折々細雨／蒸暑シ 十七銭タバコ／三十三銭タバコ／二十銭虫二疋／十一銭入浴／メ八十一銭

下欄

○来客ナシ／甘き食物一切うれしからず塩辛ものが好し／いつも夏季は元気も出て冬季とは異り凌ぎよく消光せしが本年は暑さにまけて元気おとろへ大困難 是全く

老衰せしためならん 蒲柳之質が七十四才まで生きた事とおとろへるも当然／近傍高雄山縁日にて鈴虫ヲ求ム／夕食 自製ヤサイサラダ

・八月二十二日

上欄：三十七銭タスリ／十四銭コドモ／十八銭タバコ／十一銭入浴／五十銭新聞／メ一円三十銭

下欄

来客ナシ／午後二時頃雷鳴小雨 三時頃欠む／入浴／下剤ニヨル夜中便通／夕食里芋煮付ケ／ウナギ煎豆腐

・八月二十三日

上欄：晴／十四銭郵券／三十六銭タバコ／メ五十銭

下欄 便通（午前七時半）

◎内外通信へ蒙彊新聞原稿出ス六十ヨリ七十マデ⁽¹⁸⁾

◎樫田氏来診注射第三／同氏ヨリ伊香保みやげをおくらす／中嶋氏妻女来り勝浦名産たいみそと羊羹をおくらす／北支在局篠村氏ヨリ絵葉書送り来る／夕食半ペンのり佃煮／甚だ貧弱

(18) 内外通信之蒙彊新聞原稿出ス六十ヨリ七十マデ：管見の限り原稿名は不明。

・八月二十四日

上欄：曇折々晴／十一時入浴

下欄

美代子観世音月詣／ソレヨリ実家へ行く母の病氣見舞／北支篠村氏⁽¹⁹⁾へ書状を發す／易経ヲ讀ム（坂倉氏葬儀盛大花輪五十余）／日英談判決裂⁽²⁰⁾（英国の老獺日本の迂闊）／恁々なる⁽²¹⁾と独乙は忽ち豹変／夜に入り風涼しく半天を被る／夕食鳶魚塩焼、自製シチュー／其他佃煮に煎卵

(19) 北支篠村氏：六月十九日に「篠村新太郎来ル軍属として天津へ出張するよし依て錢別二円おくる」の記載あり。前日の二十三日に篠村氏より絵葉書来る。

(20) 日英談判決裂：天津租界封鎖事件（一九三九年六月十四日におきた日本軍の疎開封鎖）に端を發した日本とイギリスの交渉。八月二十一日に交渉決裂。新聞は反英機運を煽つた（玉井清「日中戦争下の反英論」：天津租界封鎖問題と新聞論調）『法学研究』七三（二）二〇〇〇年。

(21) 恁々なる：恁は、〃こうなる〃の意。

・八月二十五日

上欄：晴／五十錢タバコ

下欄

午前九時半美代子母の病氣見舞に出張／其節中嶋氏ヨリ依頼の小児ベビー服ヲ同家に持参、帰路渠の最も信頼する百貨店松屋に立寄りブラ／飛まわり漸く正午帰宅／田中福日河北の稿料持参／下剤ニヨル便通 少量／夕食 鱈とマグロさしみ

・八月二十六日

上欄：美日／十一錢入浴／五十錢理髮

下欄

美代子又々実家へ行く其節セキノ葉持参 正午帰宅

○佐川来りかねて加藤⁽²²⁾に貸置きし書籍持参

○駒井氏来訪三崎名産若芽⁽²³⁾（ワカメ）をおくらす

○鼓腸⁽²⁴⁾にて難渋／独乙ソ連不侵条約成立⁽²⁵⁾／首尾よく日本は出しぬかれたり

(22) 加藤：三月九日、同二十四日、四月二十二日、六月七日にも出て来る加藤か？

(23) 三崎名産若芽：神奈川県三浦半島の三崎産のわかめか？

(24) 鼓腸：一月十三日に記載あり。

(25) 独乙ソ連不侵条約成立：第二次世界大戦勃発に先立つ一九三九年八月二十三日、モスクワで、ドイツ外務大臣リッペンとソビエト連邦人民委員会議長兼外務人民委員モロトフとの間に調印された、独ソ両国間の相互不侵略に関する条約。「独ソ不可侵条約」『国史大辞典』ジャパンナレッジ版、斉藤孝執筆、二〇二三年一月二二日最終閲覧。

・八月二十七日

上欄：晴又ハクモリ／三十六錢タバコ／九十七錢浅草行／メ一円三十三錢

下欄

午前美代子隣家の娘と活動見物午後二時帰宅／来客右円 ソレマデ文三るすい／樫田氏来診 五円オクル／電燈や来る二円六十錢支払う／夕景奴にて食事 ウナドンに肝ずい八十錢 二銭新ぶん 五錢色鉛筆 十錢バス往復

○夜快晴十三夜の月澄み巨り折々涼風袖を弄し物干にての月見頗る快適

・八月二十八日

上欄：晴折々クモリ／二十錢文公／二十錢ソバ／十一錢入浴／十八錢タバコ／メ六十九錢

下欄

画人水谷氏⁽²⁶⁾来る

○入浴／夜散歩 スタンドの笠ヲ求ム

(26) 画人水谷氏…水谷青夢氏か? 二月二日注一参照。

・八月二十九日

上欄…晴 三十六銭タバコ／二十銭文公／八銭フリカへ手数料

下欄

午前カシダ氏へ葉価ヲ送金／内外の短編原稿料領収(六円)⁽²⁷⁾／扇橋方ヨリタビく電話／平沼内閣総辞職⁽²⁸⁾／夕食

(27) 内外の短編原稿料領収(六円)…五月十七日及び二十六日にも内外より六円の記載あり。

(28) 平沼内閣総辞職…平沼驥一郎は、独ソ不可侵条約の締結を機に総辞職した(平沼驥一郎)の項『国史大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇一三年二月二十二日最終閲覧)。

・八月三十日

上欄…晴

下欄

来客 扇橋 雑談

○少々腹痛／美代子兄書籍ヲ届ケ来ル／田中のもとへ講談クラブ⁽²⁹⁾ヲおくる／行水／夕食 天井 美代子親子井／陸軍大将阿部信行内閣成立⁽³⁰⁾

(29) 講談クラブ…『講談倶楽部』増刊広告(『東京朝日新聞』一九三九年八月十七日付一面)

に悟道軒圓玉「劍豪島田見山」あり。なお『福岡日日新聞』に連載の「幕末劍豪伝」が九月十六日～十月二十七日は島田見山であるため、この執筆のための資料か。

(30) 陸軍大将阿部信行内閣成立…十四年八月三十日大命降下により平沼内閣のあとを受け、阿部内閣を組織したが、比較的リベラルな傾向の閣僚を起用したため、陸軍は内閣を保守勢力の代表と見なして協力せず、「木炭自動車」といわれた弱体内閣となり、四カ月余の短命で米内内閣に代わった。(『阿部信行』の項『国史大辞典』ジャパンナレッジ版、秦郁彦執筆、二〇一三年二月二十二日最終閲覧)

・八月三十一日

上欄…晴／十銭ナットウ／三十五銭ウマニ／十四銭足／五十銭タバコ／一円四十五

銭夕食バス／十一銭入浴／メ二円六十五銭／二十六円十四銭也

下欄

午前カシダ氏方診察 葉は郵送をたのみ 夕方到着

○高嶋やへ立寄り買物、浜納豆ト野菜ウマ煮ヲ求ム／夜美代子及び文三同伴奴にて夕食ウナドン、オヤコ、カマボコ／留守居は燕雄 燕雄時間はヒルのみ夜は休席ノヨシ定メシパンに困る事ナラン 夜に入るも暑氣不去／快晴月は十八日午前二時頃 独り月を鑑賞

・九月一日

上欄…晴時折々曇／十八銭 タバコ

下欄

本日は震災十七回忌／本所被服廠の跡にて不こうの死者約三万⁽¹⁾、拙者の知人のみにて死者三十人余／みよ子被服所参詣列ちかくに母親来る／さつまあげをおくらす

○田原や来ル みよ子帯の代価を支払ふ

夕食 鰯 其他ヤサイ／夜早川方涼み

(1) 本所被服廠の跡にて不こうの死者約三万…大正一二年九月一日に発生した関東大震災において、約四万人の住民が本所区（現在の墨田区南部）陸軍被服廠跡地の空き地に避難した。午後四時頃、周囲からの火災が火災旋風を巻き起こし、約三万八千人が焼死した。「東京市内で六万人の死者を出したが、そのうち三万八千人が隅田川畔の被服廠跡広場で一瞬に焼死した。まさにこの世の地獄であった。」（小川益生編『東京消失 関東大震災の秘録』、広済堂出版、昭和四八年）「本所の被服廠では避難民三千人が紅蓮の焰の包圍攻撃を受けたので被害甚しかった、め路傍に焼けたる死体が累々と積み重つて誰れとて片付けるものもなく酸鼻の極である、これ等の死傷者全部を合すると十数万の多きに上り生ながらの火葬である」（『大阪朝日新聞』大正一二年九月四日夕刊、二面）「今度の大火禍で酸鼻の極を尽したのは何んといつても本所の被服廠跡に避難した三万五千人の焼死である、当局でも手の付けやうなく六日に至るも未だその儘になつてをり異臭四辺に漲り悲惨とか惨憺とか云ふやうな形容詞を以てはとも言ひ現すことが出来ない」（『大阪朝日新聞』大正一二年九月九日朝刊、七面）

・九月二日

上欄…曇／一円 デンケン／六十五銭 ハム、カツラ／五十銭 タバコ／くわし／十二円十五銭

下欄

美代子本日ヨリ長唄ケイコ暑中休ミ／松阪やにて菓細工ヲ見食料ヲ求メテ帰宅（正午）ツカレタ／燕雄本日はヒルのみ夜は休席との事由来昼夜出演ナスモ一日一円ハトレズ然ルニ夜席休ミトナレバ生活頗ル困難ナラン同情スベキ事ナレドなまけものとして苦痛ハ自業自得カ 憫笑スベシ／夕食 ハム、鰯、其他いろ／鰯の肉のなきにびつくり 但し一尾六銭

・九月三日

上欄…晴又はクモリ／蒸暑し

下欄

美代子九時半実家へ行く親族の女子と会見スルタメとか よくいろ／名をつけて外出する女だ 大笑ひ／心身共に頗る疲労 外出甚だ困難／川倉氏来訪 正午頃帰去／愚兄来ル 雑談 二時半帰去／早川文公来り拙者と三人打よりそばを食す（愚兄美代子二円ト文公に五十銭散財）／美代子ヨリ文公へ五十銭与フ／夕食 さしみ 煎玉子

・九月四日

記事なし

・九月五日

記事なし

・九月六日

上欄…晴 あつい／九十三銭 水道／十一銭 入浴／夕食 鱈照焼／キス其他下欄

三十円郵貯コレハ早川ヨリ受取りシ百五十円ノ内ヨリ三十円の銀行利子ナリ、百二十円順利子（九月ヨリ十二月マデ四ヶ月分銀行利子ハ三十円カ……）／金は必要のものなれど凡夫の意を邪悪となす大毒薬なり／美代子 ケイコ／午前榎田氏方診察 注射薬ヲ乞ヒ帰宅

○美代子ケイコ ○田原や来りみよ子衣類ヲ求ム、コウたび／＼買はれては拙者めいわく ○洋服や興津氏来ル若々シキコート（春秋向）註文代約五十五六円ソレも三割スフ入り②／手付トシテ五十円ワタス

(2) スフ入り「スフ」はステープルファイバーの略。化学繊維でつくった紡績用の短繊維。一般にはレーヨンおよびアセテートの短繊維をさし、狭義にはビスコースレーヨンの短繊維をいう。（『日本国語大辞典』）「愛染」（引用者注「愛染かつら」）の看護婦の白服、洗濯したらスフ入りなのでキュッと縮み上り、足が出て弱り。（古川緑波『古川ロッパ昭和日記』昭和十四年八月一日付）

・九月七日

上欄…晴折々クモリ／日中頗ル蒸暑ク大困難／五十銭 タバコ
下欄

昨日外套を注文したがインバネスもありモウ一着コートもあり、然らば目下不必要の物なれどフラ／＼と気迷ふてあつらへたが、今更後悔、苦笑／九月下の分家計費及美代子へ恵金メ七十五円／ワタス
○布村氏ヨリ家屋の知らせあり 返書ヲ差出ス
美代子ケイコ

・九月八日

上欄…六十二銭 いろ／＼／十八銭 タバコ／五十銭 理髪／メ一円三十銭
下欄

今朝ラジオにて佐々木信綱③氏の和歌の放送を聴く、よくわかり趣味多く嬉し
○早川方理髪 入浴

樫田氏来診 第二 注射／町内にて防空器具④買入レにつき集金拙者五円ヲ投ズ／美代子九時半ケイコ 十一時半帰宅／洋服やかりぬい持参夜に入り来ル／夕食ソーセージ 玉子ヲソヘル、なまりかけしやうゆ、新香／夜中驟雨

(3) 佐佐木信綱（一八七二—一九六三）。国文学者。歌人。もとは「佐々木」だったが、のち「佐佐木」と改めた。号は竹柏園。和歌の歴史研究、万葉の基礎的研究に尽力。明治和歌革新運動を起こし竹柏会を設立。機関誌「心の花」を刊行した。門下に川田順、九条武子がいる。（『日本国語大辞典』）

(4) 防空器具…昭和一二年に制定された防空法により、家庭内での防空体制を強化するために用いた器具を指すか。昭和一六年には東京市防衛局が家庭防空器具の新考案を募集するとして懸賞を行っている。これらは廃品の利用をねらいとしたもので、綿布・破れ鍋を利用した防火頭巾、古い南京袋を利用した担架、古い鍋に柄をつけた柄杓、石油缶を加工したバケツなどが紹介されている。（『市政週報』昭和一六年一〇月号）

・九月九日

上欄…晴 又はクモリ／折々驟雨 日中は蒸あつく薄暮より涼し／十一銭 入浴／二十銭 クスリ／三十三銭 タバコ
下欄

今朝起床後暫時気分不快冷水にて頭を冷しソレヨリ静座幾分カ気力恢復 朝食少量／近來の行商人は格子を開きツカ／＼家内に入るその不作法不埒至極、警察はコノ取締りをなさざるは是亦不埒至極／安田銀行員野村氏来ル人形焼ヲオクラル 五時
帰去／美代子 ケイコ
○夕食 牛肉スキヤキ
夜中便通 下劑ニヨル

・九月十日

上欄…十一銭 入浴

下欄

朝食後睡眠 「折々驟雨」雷鳴

○去ル六月廿五日安田銀行を介して国策に従ひ指輪三個を売却せし^⑤が今以て何等の沙汰もなし定めし多忙なるため延引せし事と思えどさりとはいまに長過ぎたり／来客ナシ ケイコ休／夕食 自製親子丼

(5) 国策に従ひ指輪三個を売却せし…昭和一二年八月一日に公布された産金法は、国内産金の増加を図り、これを政府に集中するため、金資金特別会計への新産金の強制買上げ、産金事業の管理と助成、未開発金鉱の強制開発、産金奨励、金消費の統制などを規定した。(『国史大辞典』)「金の戸籍調べ」として昨年十一月十五日現在で全国一斉に行はれた金貨金塊の調査は近く約十万通の申告書の整理が終り次第大蔵省から各所有者宛に「金貨金塊は是非政府に売つて下さい」と個別狙ひ撃ちの売却勧誘状を出すのが今度更に金指環、金鎖、金杯、金筭、金牌等々あらゆる金製品の調査を断行することになつた」(『東京朝日新聞』昭和一四年一月十二日夕刊、二面)

・九月十一日

上欄…美日／然レドモ日中は頗ル暑かりき／十八銭 タバコ／十一銭 入浴／八十銭 夕食

下欄

早川方ヒゲソリ 美代子ケイコ／隣家鈴木氏母堂孫女、肺患にて神奈川県茅ヶ崎に転地療養中ナリシガ昨日午前死去セルヨシ行年十八才／可惜／正清来り 月賦十円持参／奴にて夕食その途中菊屋橋薬店山田屋^⑥にて麝香入にほひと記せし招牌を見る めづらし

(6) 菊屋橋薬店山田屋…十一月三日付の「菊屋橋キワ山田屋」と同一か。

・九月十二日

上欄…曇／五十八銭 タバコ／二十銭 くわし

下欄

下剤ニヨル便通／美代子ケイコ／昨日の天変予報に曰く明日は快晴と然るに曇天／午后二時半樫田氏来診 第三／ホルモン注射／駒井氏来訪

・九月十三日

上欄…晴／三十八銭／十一銭 入浴／二十銭 まんぢう

下欄

早川来ル／洋服や興津不来／大化の石川氏来ル みそづけヲオクラル

・九月十四日

上欄…晴／五十銭 入浴

下欄

下剤ニヨル便通／夕食 カレイの煮付 焼どうふ／些シモ肉なくそれで四十銭とは驚くべし

・九月十五日

上欄…美日／三十六銭 タバコ／十一銭 入浴

下欄

本日は亡父得月忌日 今ヲ距ル四十七年深川御船藏前僑居にて逝く／美代子 ケイ
コ 正午帰宅／入浴、古新聞を屑買に売る一円卅二銭

○中学の入学試験緩和ノタメ試験を廃し⑦小学校ノ成績表ニカエテ入学ナサシムル由

○単夜虫干あるはく／な平凡品、高級品とりく

独夜散歩 虫干

(7) 中学の入学緩和ノタメ試験を廃し⑦「都下の学童父兄から大きな関心を持たれてゐる明年度の入学試験問題に關しては東京府でも文部省の方針に従ひ愈明年度からは「筆記試験を全廢する」ことに決定、(中略)この結果、東京府における明年度の中等学校入学者選抜方法は一、小学校長の報告二、教科に互らない口問口答による人物考査三、身体検査以上の三項目によること、なつた」(『東京朝日新聞』昭和一四年九月一六日夕刊、二面)

・九月十六日

上欄：晴／三十六銭 タバコ／十一銭 入浴

下欄

虫干／カシダ氏来診第四 五円オクル／夕食 鱧と半ペン／本夜 安眠ナラズ

・九月十七日

上欄：小雨又ハ曇／風なまあたゝかく／五十銭 ぞせう

下欄

冬虫干ろくなものはなし／ただし人絹スフ入りは一枚もなし

◎昏々とねむる

黙醉本月は休会／夕食 駒形ぞせう鍋／物価騰貴のため一人前廿五銭トナル／五十年前は六銭なり

・九月十八日

上欄：雨 涼氣／三十六銭 タバコ／十一銭 入浴

下欄

午前八時半頃右円来り正午頃帰宅(如例雑談)／美代子ケイコ十一時帰宅／仏の日ならざるに茶めしを炊く／不得要領／雨後金風「便通」下剤ニヨル／おみつ来訪玉子ヲオクラル／右円来ル此の人の談話あまりの低声⑧につき折々聞トレズ甚だめいわく

○夕食 さしみ 茶碗むし

(8) 低声・ひくいこえ。こごえ。また、声をひそめること。(『日本国語大辞典』この場合後者を指す。

・九月十九日

上欄：雨／興津氏外套／持参支払ズミ

下欄

夕刻右円来ル、川倉妻女来訪 雑談／美代子 ケイコ／右円ト云フ芸名は我師伯円の門人の名なれば松林右円とよぶべきに大嶋右円と言へり／それは大嶋伯鶴目下人氣あればその門に入り余慶に浴さんとの野心ありて亭号を大嶋と言ふ、然し更にその余慶なきため不満を抱き居るは憫笑すべし／夕食 自製シチュー 小アジの煮びたし／半ペン

・九月二十日

上欄…終日雨／八十銭 めがね／三十六銭 タバコ
下欄

ケイコヤスミ／美代子観世音朝詣帰路拙者の名刺持参にて久米の平内堂^⑨に太田氏を訪ふ、母子とも無事にて嬢は大阪市の人に縁づきしよしめでたし〜

○保険魔、替玉ヲツカヒ保険金二万余円ヲ詐取セシ悪党出現^⑩朝日新聞所載恐るべし〜

○今月十八日凡ての物品此日の価格を以て売渡す事となりたり^⑪
新聞ヲヨムタメ拡大鏡ヲモトム 正二是探偵小説／夕食 た、き／カシダ氏来診

第一

(9) 久米の平内堂…久米平内(一六一六〜一六八三)は江戸時代前期に実在したとされる剣術家。罪業消滅を願って人々に踏みつけてもらうために刻んだといわれる石像が浅草寺境内に祀つてある。のちに「踏みつけ」が「文つけ」となり縁結びの神とされ、願掛けに文を納める風習が生じた。(『日本国語大辞典』三代目小金井蘆洲による講談本『糸平内』のほか、明治四五年に立川文庫から『武士道精華 糸平内』が刊行されている。

(10) 保険魔…昭和一〇年から一二年にかけて、市立病院のレントゲン係主任の男が患者の女性三人を殺害し、保険金二万円を詐取した事件。肺結核に罹った被害者を全治させると騙して生命保険に加入、健康診断に替玉を用い、治療を装って劇薬を飲ませ死に至らした。(福田洋『20世紀にっぽん殺人事典』社会思想社、平成一三年)『東京朝日新聞』昭和一四年九月二〇日夕刊二面に掲載(「保険魔収容 医学博士も連座」)。

(11) 今月十八日凡ての物品…注(5)の金製品強制買上げを指すか。

・九月二十一日

上欄…大雨／夜折々雷鳴／三十六銭 タバコ／十一銭 入浴

下欄

本日彼岸の入り みよ子ケイコヤスミ／みよ子母より精進揚ゲ鶏肉^{トリニク}ヲオクルル／夕方川口ヨリデンワ明后土曜日／午後訪問スルヨシ／美代子入浴ソレヨリ縁日ブラツキ／尚書林へたちよる 約二時間／夕食 鶏肉

・九月二十二日

上欄…朝雨ソレヨリクモリ／十二銭 タバコ／四十五銭 ソバ

下欄

みよ子ケイコ 十二時に帰宅 如例百貨店見物

○大化より稿料届ク直ニ受取り領収証を発す

○加藤羊^{ひつて}来る そばを出して(削除跡あり)

○安田の長谷川と松本来ル、虎や羊かんをおくらす 直ニソレヲ利用する

○川口来ル 雑談 美代子披露のはなし

・九月二十三日

上欄…雨夜晴 九時くもり又々雨／五十銭 タバコ

下欄

本日本阪石川氏へ昨日貰ひし羊かんをおくる(送料五十五銭)／みよ子晏起急遽洒掃朝食後直登校 十一時半帰宅

○午後松本氏通帳持参

○夜早川へ行き明日日文三留守居をたのむ

・九月二十四日

上欄…半晴／午后六時頃ヨリ雨／十五銭 トリ／三十銭／一円九十銭 ウナギ／十

一銭 入浴／メ

下欄

美代子仏参りソレヨリ明治座見物トカ下剤ニヨル便通

○右田来ル 軽微なる脳溢血にておしやべり不能となる

不在中カシタ氏来ル／文三同伴おぼな(玉電¹²前)にてウナギ／午後六時頃又々カシタ氏来診第二(注射)／夕食 洋食

(12) 玉電：「玉川電車」(現在の東京急行電鉄)の通称。明治四〇年に東京の渋谷から二子玉までの間に開設された。昭和四四年に廃止。(『日本国語大辞典』)

・九月二十五日

上欄：クモリ又折々晴／秋らしくなる／七銭 トリノエ／十銭 アヘツボ

下欄

自然便／右田老婆ヲツレキタル、円鶴と言へる講談師の未亡人ニテ曾テチンドンヤの三味線弾とか、シヤンコツした然もいやしげなる拳動まづコンナものを雇ふものは尠からん、ヤミナシ／田中福日の稿料持参／夕食茶碗むしマグロさしみ

・九月二十六日

上欄：晴／五十銭 寺／一円 みやげ／廿五銭 ヤキトリ／五十銭 理髪／十一銭

入浴

下欄

午前十時美代子同道にて巢鴨本妙寺展墓、ソレヨリ同所南龍氏のもとを訪ひ十一時半帰宅／(飼犬チー公一足にて留守居)／夜早川にて理髪／神田伯龍¹³の宮本無三¹⁴を聞く／原作者は吉川英治／夕食 天プラ その拙なき事可驚／

(13) 神田伯龍：五代目神田伯龍(一八八九～一九四九)。明治三五年に神田小伯山(三代目伯山)に入門し、伯星、五山を経て明治四五年に五代目伯龍を襲名。ろ山、山陽、伯治

とともに「三代目伯山の四天王」と呼ばれ、早慶戦を講談化したり、芥川龍之介の『地獄変』や長谷川伸の『刺青奇偶』を講談化するなど新作に取り組んだ。(瀧口雅仁『講談事典』丸善出版、令和五年)

(14) 宮本無三四：神田派に流れる『寛永宮本武蔵伝』と、宝井派に流れる『天正宮本武蔵伝』の二つの系統があり、前者は江戸初期の寛永年間(一六二四～四四)を時代背景にフィクションを取り交ぜて描かれており、後者は戦国時代末期の天正年間(一五七三～九二)を背景に比較的史実に忠実に描かれている。(瀧口雅仁『講談事典』「宮本武蔵」項、丸善出版、令和五年)

・九月二十七日

上欄：美日／五十銭 寺／五十銭 子供／一円五十銭 トケイ／二円五十銭 ゲタ

／八銭 フリカヘ／一円六十銭 フジマトウ十氏／十一銭 入浴／十銭 バス／メ

六円七十九銭／二十六円七十四銭

下欄

駒井氏来訪、右田氏来リ南鶴来ル 原稿ヲワタス／午前七時三十分心行寺展墓、直ニ帰宅／本日は秋ばれの好天気殊に墓参せし事とて心気爽快／午后中嶋妻女来訪 スシトサンペイヲオクラル／入浴／夜食 奴ウナギ 帰宅アンマ／今宵は中秋の観月一天雲影なく澄渡る月頗るうつくしくめでたし／古俗によつて月をまつる／名月や亡き人のこと憶ひ出す

・九月二十八日

上欄：曇／五十四銭 どぜう／十銭 バス／メ六十四銭

下欄

昨日駒井氏来ル頗ル衰弱肺患なるか注意すべし

○今朝早川^(マ)にて散策

○美代子隣家鈴木の嬢と浅草公園映画鑑賞午前十時に出て午後三時に帰宅／内外通信の稿料六円トル／夕食は駒形どぜう／樫田氏来診 第三注射

・九月二十九日

上欄：午前中雨／午後晴テ風／三十銭 スシ／早川今日志村の長家建前ニツキ出張
下欄

田原や来ル 支払ひ／尚同店二百八十年の祝賀につきちりめんの風呂敷をおくらる／美代子パーマメント⁽¹⁵⁾をかけんとするを切に止めたため大不平、現代人ヲフリマワス 恐るべし／午後一時頃田中河北の稿料持参／夜右円来リデンワヲ依頼／夕食 走りの秋刀魚に小鰯／夜九時半 すしのムダグヒ

(15) パーマメント：「お役所の厳めしい空気に和やかな色を添へてゐたタイピスト嬢、女事務員達の服装も今後は『華美にわたらない』和装を本則とし洋装は当分質素なものに限つて許されるが、これも風変りな珍型は絶対にいけない、パーマントウエーヴは一議に及ばず禁止『模範的な髪型は追つて写真を以て通達す』とあるが、陸軍当局が果してどんな髪型を『模範的』なものとして認めるか——は注目される、尚口紅、頬紅、黛も一切いけないことになつた」(『東京朝日新聞』昭和十四年八月三十一日朝刊、一一面)

・九月三十日

上欄：半晴／二円五十六銭 角や／一円 デンケン／五十銭 チップ／三十六銭
タバコ／メ／大メ／三十二円十銭也

下欄

右円用事もなきに度々来訪中風のため言語不可解その相手となるは甚だめいわく、同人には立派な倅二人もあれど小兒多く病気にかゝり悠々涵養する事もならざるよしさりとは気の毒千万、依て近日三崎⁽¹⁶⁾へ避難する由

○燕雄来ル不在中をタノミ美代子同道にて角屋にて夕食
○今日は終日臥床ウツラ／とねむる

(16) 三崎：現在の神奈川県三浦市南西部を指すか。

・十月一日

上欄：美日／九十五銭／九十四銭 夕食／三十五銭 洋食／メ
下欄

興亜奉公日⁽¹⁾／午前カシタ氏方診察 注射 帰路大村氏ヲ訪ヒ正午帰宅 電車何れも満員／夜具ヲ干ス

○夜燕雄同行駒形⁽²⁾どぜう鍋二人前 汁 めし合計八十四銭也

(1) 興亜奉公日：日中戦争が泥沼化して総力戦の様相がこくなくなった昭和十四年八月八日、平沼内閣は国民精神総動員委員会決定の「国民生活日」の趣旨を採択して、毎月一日を興亜奉公日と定め、同年九月一日から実施した。その趣旨には、「当日全国民ハ拳ツテ戰場ノ勞苦ヲ偲ビ自肅自省之ヲ實際生活ノ上ニ具現スルト共ニ興亜ノ大業ヲ翼賛シテ一億一心奉公ノ誠ヲ効」すどあり、「早起励行」「報恩感謝」「節約貯蓄」など七項目の「国民生活綱要」を実行するよう国民に強制した(『国史大辞典』吉川弘文館 ジャパンナレッジ版「興亜奉公日」の項 由井正臣執筆 参照 令和六年一月十四日最終閲覧)。
この「興亜奉公日」について、山中恒は『ボクら少国民』(昭和四十九年 勁草書房)「II 紀元ハ二千六百年」の章で、「国民精神総動員」運動における「権力による家庭生活への干渉」の「典型的なもの」として言及し、小学生のときに毎月一日の朝に神社参拝などにかり出されたことを回想している。(二二三～二二九頁)。

(2) 駒形：五月十九日注で既出。どぜう鍋の有名店。

・十月二日

上欄…二円五十銭 祝ヒ／廿五銭 梅干と豆／一円十五銭 スシ タバコ／メ
下欄

来客 扇橋^③ 娘しげ女史男子分べん／梯子の降口にてころび右足の甲と左足の
ひざを痛め早速手当

(3) 扇橋…一月二日注で既出。落語家の入船亭扇橋(八代)(一八六五〜一九四四)。十月で
は、二十三日、二十六日、三十一日にも出てくる。

・十月三日

上欄…曇／一円五十銭 祝 廿五銭 杖 一円十五銭 スシ タバコ
下欄

小嶋氏来訪 くわしをおくらす スシヲ取りテチソウ 病気全快せし由 めでたし
く／小嶋氏本年六十二才なる由 打見たる所 五十三四才か若い人なり

○早川来ル、 雑談

○美代子ケイコ 松坂屋にて小児衣類ヲ求め扇橋娘出産祝ひとしておくる／夕食
あじ サンマ カツレツ 和洋交々 イヤそのまづい事

・十月四日

上欄…曇／四円五十銭 東劇^④切符三人／二十銭 ヒゲ／十一銭 入浴／五十銭
クスリ／メ五円卅一銭

下欄

午前ヒゲソリ 文三来ル みよ子 ケイコ 十一時半帰宅

○文三ヲシテ 八日東劇切符ヲ求メル 四等三枚 ○入浴

○入浴後頗る睡眠を催し難堪

○燕雄来ル 雑談／「夕食 牛肉 スキヤキ」

(4) 東劇…築地にある東京劇場。一月十四日に既出。

・十月五日

上欄…曇／五十銭／二円 本

下欄

来客 駒井氏 一宿氏^⑤／みよ子母じや人 早川来ル 柿ヲオクラル／風邪の気
味にて些しく発熱／松茸三寸あまり二本にて廿五銭也はたかすぎる／夕 カレイ煮
付 松竹豆腐

(5) 一宿氏…野浦一宿。二月二十五日、三月五日、六月二十七日、十月二十三日にも出てく
る。

・十月六日

上欄…晴

下欄(記載なし)

・十月七日〜十日まで下欄に「脱落」とのみ記載あり。

・十月十一日

上欄：曇／四十七銭 タバコ／十八銭

下欄

大阪石川氏ヨリ松茸ヲオクルル^⑥ 早川へ裾分け

○夜早川へ行く／報知新聞^⑦記者来り怪気焰ヲ筆記して帰去ル（撮影）（午后四時）

⑥ 大阪石川氏ヨリ松茸ヲオクルル：「大阪石川氏」とは、「大阪化粧品商報」の編集責任者

石川静三郎（六月二十二日注に既出、十月ではほかに二十四日に出てくる）。九月二十三日の日記に「本日大阪石川氏へ昨日買ひし羊かんをおくる」とあるため、松茸はその返礼か。

⑦ 報知新聞：十月十五日の日記に「報知新聞夕刊に拙者の談話けいさい」とある。

・十月十二日

上欄：雨 午前ヨリ雨 正午漸く劇シク暴風雨の●（微？）アリ／夜アメヤム

下欄

川倉妻女来ル 笥めし／美代子実家へ行く手製笥めしを持参 正午頃帰宅ソレマデ

川倉妻女留守居／駒井氏^⑧みよ子の衣服持参／夕食 アイナメ煮付 白菜なべ／

榎田氏より通じぐすり到着

⑧ 駒井氏：一月五日注に既出。呉服屋か和裁業者か。十月ではほかに、五日、二十四日に出てくる。

・十月十三日

上欄：（記載なし）

下欄

久々に陽を見る／榎田氏へデンワ クスリ註文

坂下氏令嬢三十五日^⑨につき風呂敷をおくらす（榎田氏来診第一）

感冒甚だよろしからずセキにて苦しむ／人事興信所の中島とか言へる人來訪久寿男の事につき浪上家の事を聞く

○南鶴^⑩氏来り越後伝吉^⑪キリヌキをワタス／三十円ウケトル○燕雄来ル 如例 雑談／夕食 サシミ 玉子

⑨ 三十五日：法要のことか。三月三十一日に「榎田氏診察セル坂下氏の令嬢肺患なるよし」とある。

⑩ 南鶴：五月十二日注に既出。十二代目田辺南鶴（二八九五～一九六八）。十月十五日、十一月一日にも出てくる。

⑪ 越後伝吉：大岡越前守の裁きぶりを描く説話群、大岡政談の中で、勤勉実直かつ孝行者である越後伝吉を主人公とする話。江戸時代の随筆『譚海』（津村淙庵）に記された話を、講談師の神田伯龍が講談に仕組んだとされる。松本亀松「巷説越後伝吉」（『帝劇』昭和四年六月号 帝国劇場文芸部 国立国会図書館所蔵本）には「越後伝吉といふ人間は、大岡政談を通して素晴らしく有名な男である。大岡越前守が名奉行である事を知つて居る程の人なら、誰でも越後伝吉を知つて居る事と思ふ」（三三頁）とある（ほか、伊坂梅雪「越後伝吉に就て」『帝劇』昭和四年六月号（前掲） 三一頁、下中彌三郎『大百科事典』第三卷第一冊 昭和十二年新装分冊版 平凡社 国立国会図書館所蔵本 「越後伝吉」の項 二四二頁 参照）。

悟道軒円玉の「越後伝吉」は、昭和六年十月一日～昭和七年三月十三日まで「名古屋新聞」にて連載された（全一五一回）。この連載については、中一弥『挿絵画家・中一弥——日本の時代小説を描いた男』（構成・末国善己 平成十五年 集英社）「第二章 新人時代」に、次のようにある。

「名古屋新聞」から田舎の方に仕事の打診がありました。悟道軒円玉という講談師の連載をやらないかというのです。当時は講談師が演じたものを速記して、あちこちの雑誌・新聞で連載していましたが、悟道軒円玉さんは自分で書いていました。（略）昭和六年の秋、東京に行き、悟道軒円玉の『越後伝吉』という講談に、絵を書き始めました。（五四～五五頁）。

・十月十四日

上欄：美日／三十六銭 タバコ／二十銭 郵券

下欄

外套 虫干し 其他 皮革モ、／美代子母来り食料ヲオクラル

○感冒いまだよろしからず臥床／美代子 ケイコ 正午帰宅／夜正清来り月賦金十
円持参／夕食 甘鯛照焼 玉子煎

・十月十五日

上欄：曇 むしあつく風は南／三十六銭 タバコ／三十六銭 タバコ／四十銭 リ

ハツ●●(など?／なば?)／メ

下欄

南鶴のもとへ原稿おくる

○カシダ氏ヨリおくれし通じ薬によつて便通少々 鼓腹にて閉口／夕方 早川
ヒゲソリ／報知新聞夕刊に拙者の談話けいさい／田舎者が江戸弁でヌカす⁽¹²⁾事と
て修辞甚だ乱暴 尚言はざる事ヲ書かれるはめいわく至極／夕食 肉 スキヤキ

(12) ヌカす：原本では「ヌカす」の「か」「す」の間に小さい「は」が書かれている。

・十月十六日

上欄：雨／一円三十銭 本

下欄

朝六時半起床 体温六度五分／朝食 卵／二時半榎田氏来診

○注射(第一) 松竹しめじ贈らる／昼 野(八ッ頭、チクワ) 菜

・十月十七日

上欄：雨

下欄

体温 七度二分 セキが出る／報知新聞社より写真来る／其内一葉小林栄氏⁽¹³⁾の
許に贈る／終日うつとうしき天気にて嬉しからず／寝たり起きたり／朝隣家鈴木氏
来る／夜天井を食くす

秋の夜や写真に老ひし我身かな

落葉まふ夕べの鐘のながれかな

(13) 小林栄氏：八月二日に「笹塚の小林栄氏」として既出。

・十月十八日

上欄：晴／五十銭 ケム

下欄

六時半起床 体温七度一分／榎田氏の許へ電話 お薬をたのむ／正午頃久寿男の縁
談につき帝国興信所山岸武男とか言へる人乱入 我家の事をきかれる 甚だめいわ
く／土本へ返書を出す／夕食 ブリ テリヤキ

・十月十九日

上欄：晴／五十銭 タバコ

下欄

本日お茶とう⁽¹⁴⁾にて美代子五時に起き隣家老母と二人にて行く 七時帰る／本朝

は さむけはげしく熱八度／美代子子供を伴れ松屋に行く 十一時頃早川文三に来て貰ふ 十二時きたく。／昼過 人事そうだん所の人来り貸したる本を持ち来たる熱二分下る／松本氏より電話 伯き田かつ女史⁽¹⁵⁾に葉書速達を出す。びやうき中居て貰ふため／夜はうどん煮にて肉ヲ入れて／家政婦ニデケンワ 夜八時頃ヘンジ、廿二三日頃ヨリ キタルト

(14) お茶とう…茶道のことか。

(15) 伯き田かつ女史…六月八日に既出の「伯耆田カツ」という家政婦。

・十月二十日

上欄…半晴 夜に入り風／五十銭 不明／靖国神社祭典⁽¹⁶⁾

下欄

檜田氏来診 第二 注射ハセズ／水谷氏⁽¹⁷⁾来り雑談 川口⁽¹⁸⁾へ紹介の名刺ヲ与フ
／美代子めづらしく一日神妙ニ在宅／夕食 セイゴ(魚) 刺身(マグロ)

(16) 靖国神社祭典…『通信協会雑誌』昭和十四年十一月(第三七五号)「通信日記」一五一頁

(国立国会図書館所蔵本)の十月二十日に「靖国臨時大祭に付諸官員並陸海軍軍隊、諸生徒に 賜暇」とある。また、一四九頁「靖国神社臨時大祭記念特殊通信日附印」に「東亜新秩序建設の聖戦に散華の英霊合祀の為十八日から靖国神社臨時大祭挙行せらるゝに当り、其の挙国的盛典を記念して同日から二十四日迄一週間、麹町郵便局及同局靖国神社境内臨時出張所並に件郵便局に於て図の如き特殊通信日附印を使用する旨十月十六日官報を以て告示された」とある。

(17) 水谷氏…画人水谷青夢(二月二日注に既出)か。ほか、六月六日、八月二十八日にも出てくる。

(18) 川口…川口松太郎のことか。

・十月二十一日

上欄…五十銭 ケム

下欄

煙十来ル 福神漬持参 五十銭返礼／薬到着 ○所得税及電話料金納入

○新聞文藝社⁽¹⁹⁾ヨリ稿料は月末送るとの事

○本日は防空演習予行 美代子出勤

○山根氏⁽²⁰⁾ヨリ伊達原稿料送附五十一ヨリ百マデ／夕食 甚だまづき洋食

○雑煮を食す 甚だまづし

(19) 新聞文藝社…「日本学藝新聞」を発行していた出版社。光永眞三編集兼発行『新聞総覧

昭和十四年』(昭和十四年 日本電報通信社 国立国会図書館所蔵本)の「全国通信社・広告代理業一覽」には「昭和四年一月創刊、個人経営、新聞連載長篇、中篇小説、学藝原稿、漫画、講談、落語、童話、婦人家庭欄記事、囲碁、将棋、聯珠の通信、旬刊『日本学藝新聞』の発行。／社長兼主幹川合仁、編集長大島隆一、営業主任山本奎司、新聞編輯主任遠藤斌」とある。また、西山勇太郎『低人雑記』(昭和十四年 無風帯社 国立国会図書館所蔵本)には、「川合仁氏は、新聞文藝社を経営せられ、その余力をもつて、吾国唯一の文化新聞である『日本学芸新聞』を発行されてゐられるのだ(略)昭和十四年二月十五日」とある。

(20) 山根氏…二月三日、八月三日に既出。八月三日には「蒙彊新聞社代理山根氏」とある。

・十月二十二日

上欄…半晴／三円 花輪

下欄

飯甚だ不出来、毎日炊くめしなれど満足なるめしはこ、七八年なし 就中今頃は眞のあるめしとて大閉口／早川来り ヒゲソリ
○中村美容室の老父病死につき花輪ヲオクル

・十月二十三日

上欄…晴／五十銭タバコ

下欄

今日は熱高く終日床にて気分悪し／美代子母来り くりめしをおくらす／美代子、文三をるすに頼み実家に行く 二時半帰宅／夜扇橋氏来り上等五もくを馳走する／一宿氏来りたんざく三十枚持来りひまの時お頼みするとおいて行く／扇橋氏娘安ざんの祝として鶴の子餅ヲオクルル／扇橋いつもくく夕方来りてつまらぬ雑談ヲナシ夕飯を食シテ帰去ル／サテモノいやしき事よ

・十月二十四日

上欄…(記載なし)

下欄

体温七度二分／安田預金の長谷氏来る／駒井氏美代子のすそもよう持来る／大阪化粧品の石川静三郎氏²¹来る

◎樫田氏来り 五田菓子代／本日はう空の第一日²²にて家外は大騒ぎ也／我家もじゅんぴおこたらず四辺をかこみ九時床に付く／夜食 いなだ、さんまのみそづけ

(21) 大阪化粧品の石川静三郎氏…六月二十二日に既出。十月では、十一日にも出てくる。

(22) 本日はう空の第一日…昭和十四年度第三次防空訓練の第一日目ということ。『帝都消防』第十五巻第百二十七号(昭和十四年十一月 帝都消防協会 国立国会図書館蔵本)の「昭和十四年度第三次防空訓練総評」という記事には、十月二十四日に始まり、「前後七日間といふ長期にわたつて施行された本年度掉尾の防空訓練演習」が十月三十日午前八時三十五分に終了したこと、それに際して、「東部防衛司令官川岸文三郎中将」が三十日午前十時半に発表した談話を掲載している。その談話には、特に東京の防空訓練について、「就中東京地方は毎日数回、しかも長時間にわたつて訓練空襲警報発令せられ

たが仮令難解空襲を受けても各防空機関及び国民は一致団結、滅私報告、沈着敏活なる動作を以て敵の空襲に打克たねばならぬ」とある。また、昭和十四年十月三十日付「東京朝日新聞」朝刊四面、「防空訓練の感想(上)」の「小原内相夫妻の談」には、「けたたましい空襲警報のサイレンが鳴り響く訓練第四日目の二十七日午後六時半、暗闇を衝いて、防空演習の総元締小原内相邸を訪れ」た記者に、婦人が、いざ空襲となったときに備えて隣同士で挨拶などをしておくことが大事であることや、水をバケツで運べるように体力を練っておくことが大事であることを話したとある。一方で、翌日の十月三十一日付の同新聞朝刊六面「防空訓練の感想(下)」の記事において林美美子は、「サイレンが鳴ると、戸口にモンベ姿の主婦が出て立つてゐる。子供は往来でのんびり遊んでゐる」という様子に対して、避難の練習が必要だと述べている。続けて林は、自分の住む町について、「まだ郊外のやうな処なので、防空演習に対する気持ちは何だか形式的だ。或る新聞には、高官夫人が、蛇の目の傘をさして、モンベ姿で高下駄をはいて、家の前におちつとつ、たつてゐる写真が出てゐたけれど、これではどうにもならぬと思ふ」として「素早く避難する工夫も必要だと思ふ」と述べている。

なお、防空演習(防空訓練)とは、国家総動員の一環として構想された、空襲の被害を最小限度にいとめることを目的とした訓練である。当初は在郷軍人会・青年会・青年訓練所などを軍部が動員する機会として利用されたが、昭和十二年四月五日に防空法が公布(十月一日施行)されてからは、地方長官の設定する防空計画のもとに防空演習を統合し、地域住民全体を動員しようとするものになる。十戸程度の家庭防火隊の組織が必要とされ、隣組の画一的組織化を方向づけ、さらに昭和十四年四月一日からは防護団と消防組を合体して警防団がつくられ、防空演習が隣組の主要業務の一つとなっていた。(『国史大辞典』吉川弘文館 ジャパンナレッジ版「防空演習」の項 古屋哲夫執筆 参照 令和六年一月十四日最終閲覧)。

・十月二十五日

上欄…雨／たばこ 36

下欄

雨にて気分不快 朝食大根味噌汁／ほうきかつ女史病気にて来る事出来ぬ由／昼うどん煮 熱朝七度二分 昼 七度／終日床に休む 昨日よりむねがつかへる 気分不快／夜に入り豪雨／朝七度二分 午後一時／夜 七度／夕食／さしみ ホーレ

ンソウ

・十月二十六日

上欄：雨／五十銭ウナギ

下欄

同盟通信⁽²³⁾ヨリ新春の原稿の依頼あり／朝六時半六度三分 正午六度七分／今以て家主家屋修繕せずサテモ家主のづう／しき事おどろくべし

○雨中防空演習大サワギ

○扇橋の娘男子ヲ生シが扇橋付添にてソレヲカ、ヘテひいき先を一周スルヨシコレハ祝儀としてエムを貰ふためさても現代の藝人式／夕食 さしみ 其他 ホウレンソウ

(23) 同盟通信・同盟通信社か。同盟通信社は、昭和十一年一月に設立された国家代表通信

社。当時の二大通信社日本電報通信社と新聞聯合社を合併して成立した。なお、昭和二十年十月に解散し、共同通信社と時事通信社に分かれた。(『日本国語大辞典 第二版』(小学館) 及び『日本大百科全書(ニッポニカ)』(小学館) ジャパンナレッジ版「同盟通信社」の項 参照 令和六年一月十四日最終閲覧)

・十月二十七日

上欄：半晴／二十銭 くわし

下欄

家屋の雨漏漸く修繕／伊達原稿十席 速達にて発送

○正午頃田中⁽²⁴⁾福日⁽²⁵⁾原稿料持参

○本日防空演習

○本日茶うけ二稲荷ずし食しソレガこたへて鼓腹 ○郵畜全払請求

○体温午前六時半六度五分 十二時六度八分 三時半七度 ○同盟通信ヨリ新春講演落語出演者同会の電話あり

(24) 田中：一月二十一日注に既出。

(25) 福日：『福岡日日新聞』五月二十九日注に既出。

・十月二十八日

上欄：晴／五十銭 リハツ／五十銭 牛／廿六銭 タバコ

下欄

防空 市中大童 聞くところによるとあまりに活動シタルタメ心臓麻痺にて死亡せしものありとか／曾テ大臣の要職に昇りし安達謙三⁽²⁶⁾は弗か●(エム?／外貨の記号?) 其他不正の手段にて一億円の資産を造り出したりとか可驚／夕食 牛肉 スキ焼

(26) 安達謙三：明治から昭和前期にかけての政治家、安達謙蔵(一八六四～一九四八)のことか。『日本人名大辞典』(講談社 ジャパンナレッジ版)の「安達謙蔵」の項には、元治元年十月二十三日生まれ、明治二十八年閏妃暗殺事件に連座、三十五年から衆議院議員に十四回当選し、大正四年の総選挙で立憲同志会を大勝させて「選挙の神様」と呼ばれ、加藤高明・若槻・浜口内閣で通信相内相をつとめたとある(令和六年一月十四日最終閲覧)。

・十月二十九日

上欄：(記載なし)

下欄

若林⁽²⁷⁾来ル いろ／とつまらぬ事をきかれる 体温七度／燕雄来る 餅を

食ひ夕飯後は菓子ラムシヤリ〜 此の人の大食にはびつくり食物を見ては羞耻の観念なし

○防空（本日も）／夕食 茶碗むし セイゴの塩焼

(27) 若林…七月十三日に出てくる若林アキラのことか。

・十月三十日

上欄…三十六銭 タバコ／八十銭 神茂（神義？）スヂ／メ一円十六銭

下欄

今朝敵機 五十機帝都空襲／我国の富豪は親英派多しとか 三井は英国の銀行に三十億円の預金あり、そが為に英国と親しくするよし、此事真実なれば不屈至極／内
外通信講料到着／本日ヲ以テ防空演習終了／夜燕雄来り 如例雑談／田中河北の稿
料²⁸持参／夕食 神義スヂ

(28) 河北の稿料…「河北新報」の原稿料。六月二十六日注既出の『大岡政談 後藤半四郎』の連載（六月四日〜十二月二十二日、全一七〇回）の稿料か。田中については一月二十一日の注に既出。六月二十六日、八月七日、八月二十五日、九月二十五日、二十九日、十二月二十一日にも田中が河北の稿料を持参している。毎月、月末か月初めに持参している様子がうかがえる。十二月七日に田中が持参したのも河北の稿料か。なお、五月二十九日、三十日、六月二日、四日、七日、十日、七月二日、八月十八日、十一月五日の日記では田中と「福岡日日新聞」の原稿の件についてやり取りした記述がある。六月九日には「通信社々員 池内祥三」が原稿の件で来訪した際も「田中へ此の事を報じて同氏ト相談なせと申しおくる」と記載している。ほか、十一月九日には「名古屋新聞大宮氏」から「名古屋工業新聞」への原稿の依頼を田中が取り次いでいる。

・十月三十一日

上欄…三十六銭タバコ／大メ／四十八円九十九銭也

下欄

樫田氏来診 第一 薬価ヲ支払フ／愚兄ヨリデンワ三日来訪スルヨシ

○新聞文藝²⁹ 九月分稿料いまだ不着

○扇橋来り海苔の佃煮ヲオクルル／夕食 駒形どぜう丸煮 一人前廿五銭トナル五十年前は六銭也

(29) 新聞文藝…十月二十一日に既出。

・十一月一日

上欄…ヒゲ二十銭

下欄

黒たこ¹来ル つまらぬ雑話／南鶴²稿料持参二円五十銭与ふ

○早川来る 文公 ヒゲソリ

(1) 黒たこ…未詳。芸界の通称「ケム重」以外で仇名が書かれるのは珍しい。

(2) 南鶴…田辺南鶴。度々既出。文末の「与ふ」は「与へらる」の誤か。

・十一月二日

上欄…曇り／一円三十六銭

下欄

朝六時半起床／「安田銀行員に据置貯金」³の帳簿及年利通帳印形をわたす、それは貯金をするため入用につき、銀行員は長谷明と言ふ人、帳簿印章は四日に届けるよ

し」

(3) 据置貯金…現在の定期預金のこと。

・十一月三日

上欄…曇りト晴、／一円 子供へ

下欄

六時半起床 本朝寒し／明治節⁽⁴⁾にて九時に礼拝 十時半愚兄来る、雑談許何⁽⁵⁾、二時半帰る／昼食 イタリーうどん愚兄より高級の朱肉ヲオクラル／美代子愚兄の依頼によつて菊屋橋キワ山田やより「アケビ」漢薬を求める／是は花柳病⁽⁶⁾の薬なるよし中嶋氏妻君来訪美代子へハン ドバックをおくらる／夕食 豚にウナギ 佃煮／扇橋娘 小兒宮参りにて来訪

(4) 明治節…明治天皇の生誕を祝した祭日。昭和二年(一九二七)制定。

(5) 許何…いくばく、と読むのである。

(6) 花柳病…性病。山田屋の「アケビ漢薬」は未調査であるが、若い女性に買わせるものではない。

・十一月四日

上欄…曇／一円八十六銭

下欄

駒井氏美代子に衣裳持参／安田行員長谷氏通帳印形持参

○美代子又々遅刻

○川倉氏細君来り 鶯笛⁽⁷⁾ヲオクラル／高尾山のみやげなるよし

寝衣のホコロビを補理して貰ふ／美代子フラレル

夕 文三 美代子 拙者会食／夕食 天ドン 茶わんむし

終日不快

(7) 鶯笛…ウグイスの鳴き声に似た音を出す郷土玩具。現在も売られている。

・十一月五日

上欄…五十銭子供

下欄

昨夜半雨 今朝雨歇み日光を見る

○午前五時頃 下剤にヨル便通為にいさゝか気分快し

○福日⁽⁸⁾ 去月廿七日以後講談掲載セズ 依て田中をしてその理由を支局に問ひ合す 何れ本社に聞合せて返事をするよし

○おまき 少女ヲ引ツレ来ル あめをおくらる、

○夕食 サシミ トウフ汁

○放送講談の味「如嚼蠟」⁽⁹⁾甚だ面白からず

(8) 福日…福岡日日新聞。既出。圓玉の連載は「幕末剣豪伝」。

(9) 「如嚼蠟」…ろうそくの蠟をかむように、味がなく、まずいたとえ。漢詩文の評によく使われる。

・十一月六日

上欄…曇／十八銭タバコ

下欄

伯龍⁽¹⁰⁾来り講談としての大平記⁽¹¹⁾を問ふ

○田原や来り美代子服を求む出来上り約七十五円余、拙者如き貧乏人としては頗る豪奢不届至極

○夕食 茶わんむし 鰯の煮つけ／樫田氏来診 第二 注射

(10) 伯龍は既出。五代目神田伯龍。

(11) 大平記…「太平記読み」が講師の元祖であるという当時の定説(関根黙庵『講談落語今昔譚』大正十三年、雄山閣)と関わりがある。

・十一月七日

上欄…半晴／三十銭 ソバ／五十銭 天ドン

下欄

美代子観世音月拜

早川、足立来ル そばを出して足立ヲモテナス／次ニ足立ニタノマレシ家具呉服の無尽⁽¹²⁾に加入 第一会の懸金ニ円美代子ヨリワタス

○美代子の衣服かねて駒井氏ニ依頼ナシオキシガ 約一ヶ月ヲ徑過スルモ未だ出来セザルにつき 今朝美代子ヨリ請求、十日マデニ持参ナストノ事 金高ノモノハコノヨウナ人ニハタノマレズ 殊ニ前金ニワタシオキシタメイよく延引

(12) 無尽…会員が毎月決まった金額(ここでは二円)を提供し。ある時点で会員の一名がそれまでの掛け金を取得するのが無尽。この場合その用途が家具呉服に限られていたようである。

・十一月八(七と誤記)日

上欄…半晴／五十銭タバコ

下欄

夜に入りむしあつし

○駒井氏来ル 美代子兄妹の衣服持参

○午前川口へ電話 夫妻不在

○同盟通信⁽¹³⁾へ原稿四種発送

○眠らんとするとベルが鳴り それにて安眠ならず

○夕食 鱒の照焼 煎卵／但シ鱒ハ季節外レ

(13) 同盟通信…十月二十六、二十七日既出。

・十一月九日

上欄…曇／三十六銭 タバコ／十一銭

下欄

美代子衣類持参にて実家へ行き

帰路中嶋へ立寄り帰宅 又々駒井方へ行ク

○今朝久々にタバコを求めるため外出(駒寿町) ラヂオキコエズ

○川口へ電話 夫妻とも不在(十時)／夜中度く放尿

夕食 かれい、あぶ玉⁽¹⁴⁾

○夜中中ヨリ電話 名古屋新聞大宮氏⁽¹⁵⁾ヨリ書状ニテ工業新聞とか言へる日刊新聞発行につき原稿依頼

(14) あぶ玉…油揚げの卵とじ。既出。

(15) 名古屋新聞大宮氏…「名古屋新聞」東京支局長の大宮伍三郎か。以下、武田悠希氏の調査によれば、中一弥『挿絵画家・中一弥—日本の時代小説を描いた男』(構成・末国善己 平成十五年 集英社)、五二頁に、中一弥が昭和四年十二月から「名古屋新聞」で連載された直木三十五の「本朝野土縁起」に挿絵を描いていたときの思い出として、同作の担当編集者が大宮伍三郎であったことと、大宮が「河北新報」とも繋がりがあった

ことについて、次のように書いている。

『本朝野士縁起』の担当編集者は、「名古屋新聞」東京支局長の大宮伍三郎さんでした。大宮さんが僕の絵をえらく気に入ってくれて、その後も、たいへんお世話になりました。当時の新聞社や雑誌社の人たちは、みんなどこかおっかないところがありました。大宮さんはとてもやさしい人でした。まだペーペーの僕に対して、大層丁寧な対応をしてくれました。もう五十歳を過ぎていたはずですが、大宮伍三郎さんが、うちは画料が安いからたいへんだっただけでしょう。今度はもっといいところを紹介しましょう、と言って、仙台の「河北新報」に話をしてくれただけです。「名古屋新聞」が当時一回二円五十銭だったのに、「河北新報」は三円でした。

なお、中一弥は、十月十三日の日記で言及されている悟道軒圓玉「越後伝吉（昭和六年）昭和七年、「名古屋新聞」に連載。詳細は十月十三日注参照。）の挿絵を担当しており、その際に「名古屋新聞」から打診があったのも「大宮伍三郎さんあたりが働きかけてくれたのか」（前掲書、五四頁）と書いている。

光永眞三『新聞総覧 昭和十二年』（昭和十二年 日本電報通信社 国立国会図書館蔵本）、昭和十一年六月十日の「新聞日誌」、四四頁に「名古屋新聞社は社屋新築と共に、（社長）與良松三郎を相談役に、（総務理事）森一兵氏を社長に、（東京支社長）大宮伍三郎氏を専務理事兼東京支社長にそれ／＼異動」とある。この、「専務理事」という点について、電通「五十人の新聞人」（昭和三十年 電通 国立国会図書館蔵本）、三三五頁、大宮伍三郎「新聞社とのわかれ」に記載された略歴には、「東京支局から、名古屋本社に転じ、専務理事となった」とあることから、圓玉の日記が書かれた昭和十四年時点では名古屋本社にいたと考えられる。

・十一月十日

上欄…雨／三十五銭 ソバ／三十二銭 タバコ／七十銭 マンマ（アンマの誤記か）／メ一円三十一銭
下欄

六月二十五日安田銀行を介して指輪三個を政府へ売却せしが昨日漸く金子を送附ありし由その金額は百三十八円九十八銭「郵貯」

○畳がへをなすにつき 二階さうじ然るに畳や不来雨ふりのためか檜田氏来診 第三と柿ヲモラフ／夕食 サシミ 深川めし⁽¹⁶⁾

夜田中ヨリ電話 名古屋工業新聞⁽¹⁷⁾のハ 一日一円五十銭トハ安イ〜

(16) 深川めし…煮込んだ浅利をどんぶり飯にぶっかけた東京庶民の味。

(17) 名古屋工業新聞…「名古屋新聞」は明治三十九年（一九〇六）創刊の日刊新聞で、昭和十七年（一九四二）に「中部日本新聞」と改題、現在の「中日新聞」の前身の一つであるが、「名古屋工業新聞」は確認できていない。

・十一月十一日

上欄…半晴／五十銭
下欄

畳や来る 冬らしくなる／午前美代子実家へ行く ついでに例の松やへ寄り買物コノ女は百貨店へ行くを以て無上の娯楽となす

○田中来ル 工業新聞挿画につき水谷方へ行く

○川口への用件ヲ依頼スル／夕食 カツレッツ、相ノ子べんとう⁽¹⁸⁾
例の如くまづい〜

(18) 相ノ子べんとう…べんとうは弁当。ご飯に洋風の副食を付けたもの。ここではおかずがカツレッツだったことを言う。既出。

・十一月十二日

上欄…美日／五十銭 牛／三十銭 ヒゲ／十一銭 入浴 メ九十一銭
下欄

早川来ル 病氣見舞の爲め 今朝早川ほんやり来る 病氣見舞
田中よりの手紙 水谷挿画承知 画料一回（ヘイ）⁽¹⁹⁾

○ヒゲソリと入浴

○久々の入浴にてツカレタ／＼／折々美代子常識に欠けたる事を／言ふ／夜 牛肉スキヤキ 豆腐清汁／文三と共に会食

(19) ハイ…丙。画家の稿料としては、甲乙の下で最も下のランク。

・十一月十三日

上欄…晴テ北風午後南風風速十八メートル程／五十銭ムダ

下欄

美代子久々にて稽古／十時出張○時四十分帰宅／洗濯した物はかけ干し なんのクスリになるか、物干頗る乱雑 整理せんものと物干へ出たれども呼吸くるしく中止

・十一月十四日

上欄…曇 折々少雨／寒し／五十銭

下欄

美代子母ヨリフナカンロニヲおくらる

○早川来て タンスのはなし 注文する／本日ヨリユタンポライレル／田中ヨリデシ
ンワ 川口夫妻不在ナルヨシ

夕食 鶏の釜めし平目につけ／茶わんむし ホウレンソウ

・十一月十五日

上欄…廿六銭タバコ／内外通信⁽²⁰⁾へ原稿発送

下欄

午前三時便通、下剤ニヨル／例年の如く七五三の祝日とて神社は頗るにぎはへり
○午后右田氏袴羽織の礼装にて訪問さる
夕食 よせ物や⁽²¹⁾の口とりとはしら⁽²²⁾

其他 ウドン ヘンナ配合なり

(20) 内外通信…度々既出。

(21) よせ物や…寄せ物屋で惣菜を色々並べた店か。口取りは突き出し。

(22) はしら…貝柱。

・十一月十六日

上欄…晴／一円祝儀／六十一銭 入浴とヒゲ／伯龍と田中へはがき

下欄

本日 拙者之誕生日(七十四年) 赤飯ヲ炊キ些カ祝意ヲ表ス筈なれど中止

○はじめて炬燵に入る

○突如として煙草一割四分の値上げ 現政府はムヤミニ人民を搾取いたすと申す風聞コレハ電車中のはなし／夕食 あさり 豆腐と ヤツガシラ⁽²³⁾／田原や来ル
支払ひ及美代子の兄の注文せし兵古帯ヲ求メル 代価五十四円五十銭

(23) ヤツガシラ…八頭。里芋の一品種。

・十一月十七日

上欄…一円二十銭／早川と煙草

下欄

法華宗の怪僧(日) 下俗人田中智学⁽²⁴⁾逝く 七十九／度々川口へデンワをかける

がイツモ夫妻トモ不在、昨日帰宅するとの事、依て本朝田中同家訪問
 田中ヨリ電話、川口目下九州出張廿日帰宅の由 コレは細君のはなし 例の披露は
 帰宅の上その日時を報ずるとの事
 生ざけ照焼に半月の清汁

(24) 田中智学…文久元年(一八六一)～昭和十四年(一九三九)十一月十七日。日蓮宗門に
 入ったが、十代で還俗し、独自の日蓮主義を唱えた。圓玉の菩提寺心行寺は浄土宗であ
 る。

・十一月十八日

上欄…曇折々細雨／気分わるし／三銭 トリノエ／田中へ

下欄

午前十時半美代子母病気に付き自転車にて出張、朝五時半帰宅

ソレマデ安眠ナラズ 病人モ少康ヲ得タルヨシ

幸子美代子午前十時実家へ出張、不在中ハ文三代理毎度の事にてお互ひに不快

美代子三時半帰宅不満の顔色奇怪至極

○文三帰去ル ○川倉氏細君来り針ヲ持行ク

○野村氏、デンワ帰路に立寄ルとの事(野村氏は安田銀行員)

○早川妻女来る／夕食 天プラ

・十一月十九日

上欄…雨／五円 見まひ／七十銭 天プラ／五十二銭 タバコ

○二円五十銭 ラジオ

下欄

美代子午前十時半出馬／母の病気につき五円見舞金を与ふ

○美代子玉茶²⁵⁾とか言へる茶を求む／五十銭煎茶にしたもの、甚
 だ不味大失敗にて ○^(マ)

夜ラジオヤ来り修繕 ランプヲ取りかへ／其他金二円五十銭

夕食 ウナギ 豆腐清汁 カツレツ

但シカツレツハ美代子の副食物

(25) 玉茶…ぎよくちゃ。緑茶の一種で、葉を丸く平たくひねったもの。

・十一月二十日

上欄…曇／二十銭 ハガキ／田中へ／田中ヨリ／亀戸天神²⁶⁾

ヨリ

下欄

午前十時文三来ル 美代子実家へ出張／午後二時帰宅

○亀戸天神々務所より廿日廿一日両日の両日宝物拝観の案内状来ル コレヲ榎田

氏、デンワにてしらせる

○内外通信ヨリ六円送り来ル 直に受取／文三来らず

夕食 すし 五もく

(26) 亀戸天神。東京都江東区亀戸にある天満宮。既出。

・十一月二十一日

上欄…三円五十銭天神／一円 夕食／メ四円五十銭

下欄

新聞同盟²⁷の春の原稿料は本日送附スルヨシ／田中のはがきに依る

名古屋工業新聞発行本朝届く／幕末十鋭士挿画は水谷青夢

狂犬病予防につき美代子犬を曳て警察署二行ク、然るに此日ハ、注射ハセストノ事空しく立戻り帰路早川へ立寄り、天満宮宝物拝観につき

○早川父子美代子拙者 四人にて亀戸天神宝物拝観／夕方清吉氏方訪問 ソレヨリ奴にて夕食頗るまづし（ウナドンに茶わんむし）

(27) 新聞同盟…既出、同盟通信に同じ。

・十一月二十二日

上欄…雨

下欄

大化（廿一ヨリ廿五マデ）同盟、落語講談四種／原稿料到着、大化廿五円同盟三十
二円也 直に領収証を發す

午後扇橋来訪 演芸会盛会ナルヨシ メデタシ〜

榎田氏来診 第一／夕食 牛肉スキヤキ

・十一月二十三日

上欄…晴／四十一銭 タバコ

下欄

美代子十時出動二時帰宅／美代子隣家の娘と共に映画見物

暈代の計算書来ル金二十円、家主と共に半額づゝ支出、

気分甚だ不快

○早川隣家インク製造商の小店員昨廿二日薄暮狼狽にて自殺歳十五 可憐々々 原

因不詳

中村氏七七忌日²⁸ 饅頭及銘茶ヲオクルル／坂倉万次郎氏百ヶ日追福²⁹ 帛及びまんぢうをおくらる

(28) 中村氏七七忌日…十月二十二日日記に「中村美容室の老父病死につき花輪ヲオクル」とある。

(29) 坂倉万次郎氏百ヶ日追福…同じく日記八月二十四日条に「坂倉氏葬儀盛大」とある。

・十一月二十四日

上欄…曇 折々雨／五十銭 タバコ

下欄

川口ヨリ電話 披露目は廿八日と確定／直に招待状ヲ發ス
みよ子廿八日は先負³⁰とて日がわるいとすねる わがま、至極

夕食 牛肉スキヤキ 其他清汁

(30) 先負…センプ。さきまけ、とも。午前中はよろしくないが、午後は支障がない。「モガ」の美代子にこの言があり、旧弊を守る圓玉が「わがま、至極」と評しているのは面白い。

・十一月二十五日

上欄…曇折々晴／一円六十銭

下欄

美代子実家へ行く／正午頃田中福日原稿料持参

○美代子ヲシテ太田氏³¹ヘスヂ³²ヲ贈る／家政婦伯耆田カツ女へはがきを發す

廿七日より出張ヲ依頼スル

○美代子夜中ドウラン化粧ト号スルながら鬼の如き容貌をつくり上げびつくり
 ○高橋英友氏⁽³²⁾妻女来り祝物ヲオクルル
 ○夕食 スヂにメヂ⁽³³⁾サシミ

(31) 太田氏…九月二十日条に既出。

(32) スヂ…ウナギの味の良いものをいう。

(33) 高橋英友氏…美代子養子縁組に際し、保証人になってくれた人。

(34) メヂ…マグロの四十センチ以下のもの。

・十一月二十六日

上欄…晴／五十銭 タバコ

下欄

四五日曇天ノミ打ツキタレド本日はめづらしく快晴、

○美代子相変らず言語不遜

○平山来ル 祝ひとして切手⁽³⁵⁾をおくらす

○夜早川来ル 美代子ヒロメにつき 操は欠席スル由 高井ト三浦ハドウスル／是も恐クハ欠席スルナラン

夕食 天プラ 大根／この天プラ甚だ不味

(35) 切手…今の商品券のこと。

・十一月二十七日

上欄…五十一銭

下欄

午前家政婦来ル 四十三四才 白粉をつけ めがねをかけ 腕時なか／ハイカラ
 日当一円四十銭 二十銭 飛上る(従来ヨリ)
 今朝 初霜を見る

初霜や 声うらさびし納豆売り

○早川来ル ひろめの話し／川口ヨリデンワ

夕食 鱈テリヤキ 其他(ひろめ会)／操高井廿八日は欠席

・十一月二十八日

上欄…晴／十一銭入浴／二十銭ヒゲ／五十銭車

下欄

家政婦多弁ナレド江戸子ニテオモシロシ

兵藤、鈴木祝物持参大いに閉中困却

本日美代子披露(嗣子としての)宴会／場所—上野池之端雨月荘⁽³⁶⁾(支那料理)

会するもの廿五名

福日本日ヨリ又々掲載(上田馬之助)⁽³⁷⁾

夜雨月荘ヨリの戻り月光冴へワタリ／上野の森と不忍の池を見て頗る佳景

(36) 雨月荘…昭和十二年(一九三七)に開業した、日本庭園のある高級中華料理店。昭和二十年(一九四五)三月の東京大空襲によって焼失した。

(37) 福日本日ヨリ又々掲載(上田馬之助)…実際の再開は十一月二十六日付から。本稿七月末尾補注参照。

・十一月二十九日

上欄…曇折々日光を見る／四十銭朝日二ツ

下欄

昨夜雨月荘の集会 太夫元⁽³⁸⁾は川口／出席員二十五名 勝手気まゝの気焰を揚げ
十時二十分参詣／紀年のため撮影

美代子高橋へ礼／早川来ル 前夜のはなし

清吉氏来ル 船橋名物羊羹をおくらる

(38) 太夫元…たゆうもと。元は芝居用語で興行の出資者の意。ここでは雨月荘への払いは川口松太郎がした、ということ。

・十一月三十日

上欄…半晴／五十銭／二十銭／メ三十二円五十二銭也

下欄

廿九日の朝刊都新聞に養女披露の宴会の記事⁽³⁹⁾あり大笑ひく

田中来り 佃煮ヲオクルル／夕食 あさり豆腐 さしみ

(39) 都新聞に養女披露の宴会の記事…吉沢英明氏『講談昭和編年史 前編』（昭和六十二年 私家版）にこの記事が抄出されている。そこでは「川口松太郎氏の肝煎りで」とある。

・十二月一日

上欄…晴 一円五十銭

下欄

美代子安田信託へ行き利子を受取る ソレヨリ実家へ行く

美代子夜家政婦ト共ニ用盛行き

○駒井氏妻女来訪 昆布ヲオクルル／○夜燕雄来ル

○夕食美代子ト共に奴にて晚餐

○本日防火デー⁽¹⁾

(1) 防火デー…昭和十四・十二・一付「東京朝日新聞」朝刊六面には「東京市をはじめ全国的に一、二日は防火デー」とある。ちなみに圓玉は「帝都消防」に「奇人米搗八蔵」（昭和十三・二二）、「鬼作左」（昭和十三・三三）、「女七変化」（昭和十三・四、五）、「講談大久保彦左衛門」（昭和十三・六、七、八、九、十一）を掲載。（国立国会図書館デジタルコレクションより）。

・十二月二日

上欄…晴

下欄

午前十一時頃愚兄来ル 午後二時帰去

家政婦夜に入り帰る／平山清々楽来ル

榎田氏⁽²⁾来り皿及び硯箱ヲオクルル

夕食 湯豆腐／中嶋ヨリ勝手ナデンワかゝる

(2) 榎田氏…二月四日以降、本日記に頻出する圓玉の主治医。榎田氏とは榎田十次郎氏のことか。『東京・横浜近県職業別電話名簿 第二六版』（昭和十一・十二、日本商工通信社）によれば、榎田十次郎氏の榎田医院の所在地は東京の（日本橋）である。

・十二月三日

上欄…晴／五十銭

下欄

駒井氏細女来訪／カシダ氏来訪

・十二月五日

燕雄来り 夕食ムシャリ〜⁽³⁾とたべる(シチウ三杯 めし四碗)

あとは菓子

夜中嶋ヨリデンワ 三味線ケイコにつき

美代子に出張せよとの事 不礼至極

(3) ムシャリ〜…あたりかまわず勢い込んで食べるさまを表わす語。(『日本国語大辞典』
ジャパンナレッジ版、「むしゃむしゃ」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。なお、本
日記一月三十日、二月二十八日、七月三十一日、十月二十九日、十二月二十四日におい
てもオノマトペ(「ムシャリ〜」)を用いて、桃川燕雄をユーモラスに描いている。

・十二月四日

上欄…快晴 暖し

下欄

夕方扇橋⁽⁴⁾来ル 不相変饒舌／駒井氏来訪

美代子中嶋へ出張 バカラシキキワミナリ

(4) 扇橋…川口松太郎「風流悟道軒」(『風流悟道軒』昭和二三・一、「小説の泉」↓「川口
松太郎全集十四卷」昭和四三・八、講談社)では「落語家では入船亭扇橋が一ばんよく
来た。来るたびに何かしら土産を下げ、円玉は扇橋を可愛がって盆暮には祝纏なぞを
やった。」と書いている。尚、仏教総合誌の『大法輪』(昭和十・十二)には扇橋「落語
鼠穴」、圓玉「水戸黄門」、『痴遊雑誌』(昭和十一・九)には扇橋「昔の芸道修業
(続)」、圓玉「怪談の失敗」等々、二人は同じ雑誌に掲載。(吉沢コレクション北中12
1)。

上欄…二円四十銭 牛乳／二十銭 タバコ／五十銭 文三／安田ト伊藤女史／雄文

社

下欄

美代子 田中同伴にて川口行き

午前十一時文三来ル四時半にいたるも 美代子帰宅せず依て文三ヲ戻す四時帰宅

夜美代子無断外出 早川細君来ル 約二時間後帰宅 タビヲ求メルタメトの事

夕食 数多く(副食物) 何れも無駄なものばかり

・十二月六日

上欄…曇 午後三時頃雨／六十六銭タバコ 丸尾

下欄

清吉氏来訪 美代子の件につき五円おくらる

ソレに栄太郎梅干⁽⁵⁾ヲオケラル

(5) 栄太郎梅干…日本橋の老舗和菓子店「栄太楼」の「梅ぼ志飴」のことか。「栄太楼」に
ついては一月十五日の記事・注参照。

・十二月七日

上欄…曇り／四十銭タバコ

下欄

朝七時起床 清吉氏へのりかつぶし返礼

早川来り髯ソリ 写真持参 美代子母来る衣類持参

田中来り稿料持参／文三来り四人にてそばを食す

新聞文藝⁽⁶⁾より稿料届く／樫田氏来診 第一

夜一宿氏来り盃をおくらるその節短冊渡す

夜天ぷら豆腐露⁽⁷⁾食事／初めて湯たんぽをする

(6) 新聞文藝…十月二十一日、十月三十一日に既出。

(7) 豆腐露…豆腐のおつゆのこと。

・十二月八日

上欄…曇後晴／十六銭 湯

下欄

朝七時半起床／入浴、流し十銭と成る／文三同伴にて後

家に来り茶を喫す／虎や⁽⁸⁾より羊羹ヲオクルル

夕食 豚

湯あみ⁽⁹⁾するま冬の風のなごやかさ

(8) 虎や…京都市上京区一条通烏丸西入ルの菓子屋。寛永二二年(一六三五)以来御所の注

文を受けていた店で、東京遷都とともに本店を東京に移した。港区赤坂四丁目にある虎

屋黒川がそれにあたる。(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、「虎屋」の項、二〇

二四年一月八日最終閲覧)。

(9) 湯あみ…入浴のこと。

・十二月九日

上欄…(記載なし)

下欄

虎や羊羹を早川と駒井氏へ裾分け／細谷氏来り菓子ヲオクルル

早川板橋辺へ長家を建築 然るに建具職人左官なぞ種々勝手なるゴタクヲならべ金

錢を強要す、ソレヲナダメル イヤとりつける 受負人がその人々と同腹ツマリ

早川ヲアマキ人間と見て愚弄して約条意⁽¹⁰⁾外の金銭ヲムサボランとなすその行為

にくむべし

・十二月十日

上欄…晴 南風／一円五十銭 おみつ⁽¹⁰⁾ たばこ

下欄

森田氏⁽¹¹⁾来 パンヲオクルル／天プラ茶わんむしにて馳走

美代子ムダづかひー／文三釣りとりし鯊⁽¹²⁾を持参

夜 森田氏愚嬢我三人にて食事／天プラ⁽¹³⁾ 茶碗めし 蛎めし

(10) おみつ…二月二十五日、九月十八日に既出。

(11) 森田氏…五月七日、五月十四日、六月十九日、八月四日に既出。

(12) 釣りとりし鯊…初心者でも簡単な仕掛けで釣れるので、休日などの手軽な行楽として親

しまれ、ことに東京湾の鯊釣りは人気がある。釣れた鯊は天ぷらや佃煮にする。(『日本

の歳時記』ジャパンナレッジ版「鯊釣」の項の要約、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(13) 天プラ…鯊の天ぷらか。

・十二月十一日

上欄…晴／五十銭タバコ

下欄

来客ナシ／美代子ト喧嘩／樫田氏来診 第二注射

・十二月十二日

上欄：廿五銭 九月份肥⁽¹⁴⁾／五十銭理髮

下欄

大村氏年暮 海苔の佃煮ヲオクルル／タンスは明日持参との事

早川来りて理髮／駒井氏来訪 絨緞ヲオクルル

太田はるみ母堂来訪 京都名産駿河屋の菓子ヲオクルル

美代子松坂や及び大志推師方へ行く／出産祝ひ午后一時半帰宅

(14) 肥：(動詞「こえる(肥)」の連用形の名詞化) 土地の養分を豊かにし、作物の生育を促

進する目的で田畑にほどこすもの。下肥、堆肥などをいい、また、人間のそれを用いたことより、人の糞尿をさしている。(『精選版 日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、

二〇二四年一月八日最終閲覧)。

・十二月十三日

上欄：曇 寒し／二十銭小僧

下欄

来客ナシ／夜に入り箆筒⁽¹⁵⁾届ク(百五十二円)

茅屋には不相応とは言へ家具の事とて 焼けずば末代までの重宝

(15) 箆筒：川口松太郎「第三話 遊女夕霧」(『人情馬鹿物語』昭和二八・六〇九、『小説新

潮』↓『川口松太郎全集十五卷』昭和四三・十二、講談社)によれば、「人間には誰に

も一つは無駄がある。俺も結城が道楽なんだ。着ようと思つて買うんじゃねえ。芸者や

女郎を買うのと同じ気持ちなんだから文句をいうな」と、たしなめるようにいった。道

楽らしい道楽を持たない円玉には、結城の着物を捨てるのが、何よりの楽しみだつ

た。」と記述がある。おそらく圓玉の箆筒には(結城袖)が数多く収納・保管されてい

・十二月十四日

上欄：五十銭

下欄

「以下、取り消し線が引かれて、削除された本文であるが翻刻する。」

美代子母来ル(年暮)

・十二月十五日

上欄：曇／五十五銭

下欄 (記載なし)

・十二月十六日

上欄：雨 午后四時頃ヨリヤム曇天／五十銭

下欄

樫田氏来診第三 五円オクル

夜兵藤来り十円持参 ソレに砂糖⁽¹⁶⁾ヲオクルル

尿検査 少々腎患

(16) 砂糖：昭和十四・十二・十四付「東京朝日新聞」朝刊四面には「酒、麦酒、砂糖の増

税、消費者に転嫁か」の見出しで報じられている。当時砂糖は贅沢品であった。

・十二月十七日

上欄…晴／一円五十銭 くわしと送料／卅銭 髻／十六銭 湯

廿銭 タバコ／五十銭 天プラ

下欄

吉田母堂へ塩かま¹⁷⁾をおくる

本日浅草寺年の市¹⁸⁾ひさく¹⁹⁾にて入浴

早川方にて川倉に遇ふ／「川倉氏来り 相変らず気焰万丈¹⁹⁾」

「早川方ヒゲソリ入浴、

(17) 塩かま…みぢんこに砂糖を和し、固めて方形に切りたる菓子。陸前国塩竈浦にて製し初めたるよりいふとぞ。(上田万年、松井簡治『大日本国語辞典 卷二』「塩竈」の項、昭和三、四、富山房)。

(18) 浅草寺年の市…毎年二月一七、一八日の両日、東京浅草の浅草寺境内に立つ歳の市。正月用品や台所用品を商い、にぎわう。(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、「浅草市」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。なお、正岡容「下町歳時記 年の市」(『東京恋慕帖』昭和二三・十二、好江書房)ちくま学芸文庫『東京恋慕帖』平成十六・十、筑摩書房)によれば、「浅草の年の夜の賑はひは、いま此を小林清親が旧東京版画の上に偲ぶ可し。さらに大正年代の富士山印東京レコードなる故柳家枝太郎が天津絵の「両国」の一節に聴くもよからう。曰く、浅草市の売物は、雑器に塵とり貝杓子、とろろ昆布に伊勢海老か、桶ア負けた、市ア負けた、笹に付いたるこの面は、お福のお面と申します。」と描かれている。

(19) 気焰万丈…さかんに気炎をあげるさま。(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

・十二月十八日

上欄…半晴／十銭 衛生²⁰⁾／四十銭 タバコ

下欄

美代子年の市へ出勤 ○時半帰宅／燧石²¹⁾なぞ求める

煙十来ル一円トラレル(砂糖持参)

まき²²⁾年暮礼 玉子ヲオクラル 返礼トシテ二円オクル

奸妹のもとへ操²³⁾夫婦高井夫婦²⁴⁾訪問 拙者の事につき

いろ／＼中傷的の熱を吹き²⁵⁾奸妹を煽動して喧嘩を待たれど

一笑に付し²⁶⁾去り奸妹ほんやり帰宅

夕食 さしみ 野菜其他

益田家²⁷⁾下賜²⁸⁾品受納のはがき着

益田家執事とあり男爵²⁹⁾様は恐しい

(20) 衛生…生理用品のことか。

(21) 燧石…ほぼ純粹の珪酸から成る微晶質ないし非晶質の緻密な岩石。火打石として用いられた。(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。ついでながら、昭和十四・十一・二十五付「東京朝日新聞」朝刊六面には「マツチ不足を補ふの弁 古新聞の紙撚りや燧石」の見出しで報じられている。

(22) まき…四月十六日、四月二十一日、十一月五日に既出。

(23) 操…波上操のこと。四月十八日以降、たびたび登場している。

(24) 高井夫婦…三月二十二日に既出。

(25) 熱を吹き…気炎を上げる。大言を吐く。(『デジタル大辞泉』小学館、ジャパンナレッジ版「熱を吹く」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(26) 一笑に付し…笑って問題にしない。ばかにして相手にしない。(『デジタル大辞泉』小学館、ジャパンナレッジ版「一笑に付す」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(27) 益田家…益田太郎氏のことか。氏は「男爵益田孝の長男として明治九年東京都品川御殿山に生れた。慶応義塾卒業後実業界に入り、各会社の重役を兼ねていたが、明治四〇年帝國劇場株式会社の成立とともに文芸担当重役として就任した。その後太郎冠者のペンネームで数十編の脚本を執筆、みづから演出の任に当たっていたが、昭和四年二月帝劇が松竹に併合されるに及んで重役を辞し劇作の筆を絶った。(早稲田大学演劇博物館編『演劇百科大事典第五卷』円城寺清臣執筆、平凡社、昭和三六年)。なお、宮信明氏の「素人見たやうだ」落語作家としての益田太郎冠者」(『今日もコロケ、明日もコロケ』益田太郎冠者喜劇「の大正」展示図録 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、平成二六・三)によれば「益田太郎は、太郎冠者の筆名で多くの喜劇を書くとともに、「柱時計(道楽書生)」「かんしゃく」「堪忍袋」「格気の見本」等々、いくつもの落

語を創作した。」とある。

(28) 下賜…高貴の人が、身分の低い人に物を与えること。(『デジタル大辞泉』小学館、ジャパンナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(29) 爵…日本で、明治憲法による華族の世襲的身分階級。公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の五等があった。(『日本国語大辞典第二版』ジャパンナレッジ版、「爵」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。ちなみに高野正雄氏の『喜劇の殿様―益田太郎冠者伝』(平成十四・六 角川書店)には「当時の演劇人は太郎冠者の仕事に対して、大金持ちの道楽」という偏見をもっていたのではないかと思えてくる。「面白い」が、「衣装代に大金をかけているのはけしからん」という吉井勇の「唾旅行」評など、その好例だろう。太郎冠者喜劇が正当に評価されなかった」と記述がある。

・十二月十九日

上欄…晴テ風

下欄

美代子観世音朝詣

下剤ニヨル便通 気分不快／軽微なる頭痛／駒井氏来訪 依頼貳百円³⁰貸与(借主は芳町³¹の芸妓やなるよし)／夕食 鱈のチリ

(30) 貳百円…週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(昭和六三・六、朝日新聞社)によれば「銀行の初任給」は「昭和二年〜昭和十五年 七十円」と記載。「貳百円」は約三か月分に相当する。

(31) 芳町…江戸時代初期にはヨシの茂った湿地帯であったが開拓され、元和四(一六一八)年遊里を集めて葭原(吉原)と改称。以後歓楽地として東接する人形町とともににぎわった。(『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』の「日本橋芳町」の項の要約)。尚、吉井勇「芳町哀歌」(『東京紅燈集』大正五・五、新潮社)には「芳町に君を見し日をしてのびつつ歌つくる子もあはれならずや」、「よそごとと思ひて聴けどはかなしや芳町びとの恋の噂も」等、「芳町」の短歌七首がおさめられている。

・十二月二十日

上欄…曇 寒し／四十銭 タバコ朝日二個／十円 美代子小づかひ五円 坂元へ年暮／樫田氏来診第一

下欄

来訪、扇橋、安田行員長谷、カレンダールをおくらる
鈴銀氏ヨリ赤飯及ビ三越³²切手³³をおくらる

美代子田原町池田園(茶店)³⁴にて味の素³⁵を求む
大勢群集してお祭り気分を現したるよし

○夜に入り駒井氏来訪 貸金につき証金印鑑証明手形等持参

明年三月期限

夕食 いわしつみ入レ むつ荒煮

○川倉妻女来訪 雑談

(32) 三越…東京都中央区日本橋室町に本店がある百貨店。(『日本国語大辞典』ジャパンナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。和田博文監修『コレクシヨン・モダン都市文化 第七二巻 帝劇と三越』(平成二三・十二、ゆまに書房)の「昭和十四年」の項には六月、「三越」商品券売場で貯蓄再建、支那事変国債を発売する(1日)。(10月、「三越」銀座支店が「戦線で喜ばれる慰問袋の会」を開催(3日)、11月、「三越」ニューヨーク万国博覧会日本館を設計施工。貯蓄債券事変国債などを売り出す。節米に協力して食堂献立の種類を減らし、七分搗米を使用。」等々、「三越」の歴史が詳細に記載されている。

(33) 切手…古川ロッパ著『古川ロッパ昭和日記(戦前篇) 新装版 昭和九年〜昭和十五年』(平成十九・二、晶文社)の「昭和十四年十二月二十七日(水曜)」には「文藝春秋社から、お歳暮に五十円の商品切手が来た、儲かるし、ハデな忘年会も出来ないし、税にとられるよりは、といふので方々へ撒いたものらしい。初めてのことである。」と記されている。

(34) 田原町池田園(茶店)…「茶のつたや」の公式ホームページの「History」には「一九二八・四・一〇 祖父陸朗が浅草田原町の池田園茶舗にて修業後、当地高田馬場にて、茶葉専門店「つたや茶店」を創業」と記載がある。二〇二四年一月八日最終閲覧。 <https://cha-sutaya.wixsite.com/cha-sutaya>

(35) 味の素…味の素株式会社『味の素の五十年』(昭和三五、味の素)には「うま味」の正

体が何であるかという問題と取り組んだ一人の化学者があつた。東大の池田菊苗である。彼のひじょうな努力により、明治四十一年（一九〇八年）発明されたのがグルタミン酸ソーダである。」と記している。ちなみに昭和十四・十二・二十二付「東京朝日新聞」朝刊五面、「味の素」の「広告」には「時局柄従来のブリキ缶をボール紙の容器へ代へました」とある。

・十二月二十一日

上欄：四十銭 朝日二ツ

下欄

愚兄ヨリ電話 炭一俵とゞける由

米欠乏、薪炭欠乏⁽³⁶⁾、物価暴騰 国民塗炭⁽³⁷⁾のクルシミ

○木綿物ナシ 晒布一反約五円、足袋一足一元⁽³⁸⁾

○内外ヨリ六円オクリキタル

田中来ル 河北原稿⁽³⁹⁾二十円写真ワワタス

(36) 米欠乏、薪炭欠乏…昭和十四・十二・十二付「東京朝日新聞」朝刊二面には「米穀・薪炭の配給、緊急対策要望」という見出しと共に「最近米穀、新薪等生活必需品物資の配給は頗る円滑を欠き一般国民に不安の念を醸成し、且つ中小工業の必需資材の供給も非常に不足し中小工業者が益窮地に陥つてゐる」と記述がある。

(37) 塗炭…泥にまみれ火に焼かれること。転じて、ひどい苦痛。きわめて辛い境遇。(『デジタル大辞泉』小学館、ジャパンナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(38) 足袋一足一元…吉沢英明氏の「番外「悟道軒日記帳」抄録(下)」(『諸芸懇話会会報』平成五・九)によれば、「戦争の余波が彼の身辺をも脅かし始めた。こんな調子で三十一日迄間断なく続く。」と(注)が付けられている。

(39) 河北原稿…本日記の八月七日、十月三十日の記事・注参照。

・十二月二十二日

上欄：半晴寒し／二十銭 くわし／二十四銭 ハギ⁽⁴⁰⁾ タバコ二ツ

下欄

炭来ル／早川へ行く雑談

歩行甚だ艱難 文三同伴にて帰宅／内外原稿料六円ウケトリ

富多葉ヨリ鳥の挽肉ノ佃煮ヲオクル

○夜美代子不眠／○拙者咳嗽頻々大さわざ 下剤服用

夕食 牛のスキヤキ

(40) ハギ…大蔵省専売局が一九〇五年に発売した刻みたはこの銘柄。同年発売の官製刻みたばこ七銘柄の中で三番目に安い。(『デジタル大辞泉プラス』小学館、ジャパンナレッジ版「はぎ」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。ついでながら、昭和十四・十一・十六付「東京朝日新聞」朝刊二面には「十六日から実施される煙草の値上は兵士用の「ほまれ」を除いた外口付、両切、刻、葉巻の各種煙草を全部に亘つてゐる。」「引上げ率はホープの三割六分を最高としなでしこの二割五分、チェリーあやめ、はぎの二割」とある。

・十二月二十三日

上欄：曇 五十銭 朝日二ツ／二十銭 ヒゲ／一円五十銭 時計

下欄

本朝便通

美代子午前八時起床おそい／

美代子母来る(年暮) 返礼トシテ五円歳暮

○内外通信(山根氏⁽⁴¹⁾)宛にて伊達⁽⁴²⁾五十一ヨリ六十マデおくる
(午前十一時)

文三来り ヒゲソリ

(41) 山根氏：山根真治郎氏のことか。氏は「明治四十年中央大学法律科卒業、同年九月時事新報記者となり、同四十三年八月中央新聞へ、大正三年十一月国民新聞に転ず。昭和六年十月日本新聞協会付属新聞学院長となる。昭和十年一月内外通信顧問を兼ねぬ。」(山根真治郎著『山根真治郎』昭和三十・七、徳島新聞社、「略年譜」の要約)。ところで「ラジオと講談・落語」(山根真治郎著『山根真治郎』前掲)には、「彼(松林伯知／引用者注)も典山も新聞講談を沢山出していたが実は悟道軒円玉という名工がいて、盛んに代作していたのだった。円玉は私の一ばん親しかった男、宅には万卷と積んで頼まれれば即座に十席や二十席分書くという達者であり仲間に珍らしい学者でもあった。今を時めく作家の川口君(川口松太郎／引用者注)は、若いころ彼の家に寄食していたように覚えてる。このころ伯知は新橋、円玉は芳町、伯山はこう武所で芸者屋をしており、叩く収入よりこの方がずっとよかつたらしい。」と回想している。

(42) 伊達：内外通信の「伊達」は未詳。これは余談であるが、志賀直哉は「創作余談」(昭和三十・七、『改造』)において、「赤西蠣太」(大正六・九、『新小説』)は「伊達騒動の講談を読んでみて想ひついた。」と述べている。尚、町田栄氏は『赤西蠣太』の種本を発見(『朝日新聞(夕刊)』、昭五七・十・十四)の中で、「赤西蠣太」の典拠は、錦城齋典山「伊達騒動 蒲倉仁兵衛」(『文藝倶楽部』、大二・七)であると指摘した。その上で「典山」の名で載っているが、実際の作者は悟道軒円玉(講談速記者、書き講談作家、本名浪上義三郎、一八六五—一九四〇)であることは、内弟子として同居していた川口松太郎の話、他の作品の例などから類推できる。」と書いている。

・十二月二十四日

上欄：一円 経料／二円 夕食／三十銭 バス

檜田氏来診第二

下欄

美代子 佐藤一周忌につき同家へ出張 経料ヲトシケル
駒井氏来訪 年暮たばこをおくらる

益田未亡人⁽⁴³⁾ヨリ 美代子相続人の祝ひとして廿五円オクラル

夜美代子、文三同伴にて奴夕食 甚だまづし

○燕雄来り留守居 五もくをとりもてなす

如例ムシヤリ〜 九時半辞去

(43) 益田未亡人・益田孝男爵(一八四八—一九三八)の第二夫人のことか。川口松太郎「第十一話 歌吉心中」(『人情馬鹿物語』前掲)によれば、圓玉の親友である猫遊軒伯痴は講談「歌吉心中」をきっかけに歌吉の未亡人と再婚し、娘二人の義父となる。「間もなく妹娘には、実業界の大立者、益田孝男爵の話がきまり、妓籍から引き抜かれて第二夫人に納められた。」と書いている。「益田孝男爵」とは益田太郎氏の父親である。

・十二月二十五日

上欄：晴／五十銭

下欄

本日本正天皇祭⁽⁴⁴⁾

大阪ヨリ放送⁽⁴⁵⁾義士木村岡右衛門⁽⁴⁶⁾(劇)

コレハ拙者ノ創作 渠等にめしのたねとなりしはめでたし〜

美代子実家へ行く

美代子母例の如く持病⁽⁴⁷⁾につき出張／燕雄来る るすゐ

家政婦⁽⁴⁸⁾ヲヤトワントシタレド 何れも出はらひ(三ヶ所とも)

(44) 大正天皇祭：昭和十四・十二・二十六付「東京朝日新聞」朝刊十一面には「大正天皇神去りまして満十三年、二十五日宮中では天皇陛下御親祭のもとに大正天皇祭の御儀を厳かに執り行はせられた」と記されている。

(45) 大阪ヨリ放送：昭和十四・十二・二十五付「大阪朝日新聞」朝刊四面のラジオ覧には「昼二時 歌舞伎劇「元禄名残宴」(木村岡右衛門) 市川小太夫(間瀬久太夫) 市川段猿」の記載がある。尚、『NHK放送劇選集第二巻』(ラジオオサリスセンター、昭和三二・三)の「放送劇一覧表」その二の「昭和十四・十二・二十五」には「元禄名残宴 旭堂南陵口述 瀬川春郎脚色」と記されており「NHK放送劇」であることが判明した。この調査に関しては大阪市立中央図書館様のご協力を得ました。記して御礼申し上げます。因みに「元禄名残宴」の実際の作者は悟道軒円玉である(コレハ拙者ノ創作)

作)。しかし旭堂南陵の名で載っている理由は、注四一、注四二で示した講談界独自の慣習によるものと推定される。

(46) 木村岡右衛門・吉沢英明氏の『講談作品事典 上』(平成二十・十、「講談作品事典」刊行会)によれば、木村岡右衛門は「義士中其程知られていないが、中の人物である。」と評している。(桃川如燕「赤穂義士銘々伝」三芳屋、松陽堂 明四五・三。※『大法輪』三の七号(昭和一一・七)に、木村岡右衛門＝桃川若燕。『日曜画報』第一〇号(昭和五・九)に木村岡右衛門＝悟道軒円玉の第二席、連載物。)がある。

(47) 持病・本日記六月八日に「心臓狭窄病」と記載。

(48) 家政婦・『東京・横浜近県職業別電話名簿 第二六版』(前掲)によれば、浅草の家政婦派出来は「福登美派出婦人会(蔵前)」、「八千代派出婦人会(浅草橋)」、「日の出婦人宣伝社(七軒)」、「朝日派出婦人会(向柳原)」の四ヶ所ある。

・十二月二十六日

上欄：晴／六十銭スシ／二十銭ソバ／十銭バス／三銭コドモ

下欄

又々実家へ行く美代子

○燕雄来ル／夜燕雄同伴駒形ドゼウへ出張 大入満員

風にふかれてブル／ふるへながら空しく帰宅 夕食五もく

○早川妻女心行寺参詣 三円五十銭ワタス

○福日⁽⁴⁹⁾ 稿料ウケトリコレにておしまひ

(49) 福日：七月一日記事・注参照。

・十二月二十七日

上欄：晴／十銭ホトゴシ

下欄

六十円 家計費／町会員来ル 施無畏⁽⁵⁰⁾ 袋云々／十銭ワタス

又々町会員来り銃後云々月十銭／懸金二口たのむとの事さてもうるさき事なり
大化原稿料届ク／体温七度八分／咳嗽セキクスリ服用夕食 牛肉なべ

(50) 施無畏：仏教用語。無畏を施すこと。すなわち相手に危害を加えず恐れをいだかせないこと。三施の一つ。施無畏力をもっているために、観世音菩薩は施無畏者と呼ばれる。『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』『ジャパナレッジ版、二〇二四年一月八日 最終閲覧』。なお「施無畏袋」とは、歳末助け合いの募金箱のことか。

・十二月二十八日

上欄：晴

下欄

年暮礼 宮坂夫人石鹸ヲオクラル

檜田氏来診 薬価及び車代ヲオクラル⁽⁵¹⁾

○中食はすし／田中来り海苔ヲオクラル

体温朝七度五分／ソレヨリ七度二三分往来

(51) 車代ヲオクラル：「車代ヲオクル」の書き損じか。

・十二月二十九日

上欄：晴

下欄

気分悪く熱七度四分／食事味無くまづし

来客平山夫人来りスゞメ焼送らる／二円せいぼ出す

・十二月三十日

上欄…晴

下欄

本日も同く熱七度四分

いよゝ後一日にて正月来る

隣家老母見舞に来る

終日床⁽⁵²⁾に居る 来客なし

トルコ大地震⁽⁵³⁾にて死者十二万

(52) 終日床…圓玉は昭和十五年一月十三日、逝去した。昭和十五・一・十四付「東京朝日新聞」の朝刊九面には「講談界の古老、悟道軒圓玉こと浪上義三郎氏は旧臘来腎臓炎の爲浅草区栄久町二七の自宅で療養中であつたが、十三日午後五時四十五分死去した、享年七十五」、「氏は本所に生れ幼少の頃松林白圓の弟子になり、一風変つた講談と速記の両刀を扱ひ、著述業として今日まで五十年、この間新聞、雑誌等に速記した講談も掲載することを始めて大衆文芸の一分野を開拓、高座では『斬られ与三』『安政三組盃』『大前田栄五郎』等を得意とした」と圓玉の訃報が掲載されている。

(53) トルコ大地震…昭和十四・十二・三十付「東京朝日新聞」朝刊七面には「死者既に十一万 トルコ震災の惨禍」、「我国にも震動」「日本時間にして二十七日の午前九時十分から二時間に亘つて間然なく著しい震動を感じました、その激しさからいつて大正十二年の関東大地震にも匹敵する大規模なもの」と報じている。

・十二月三十一日

上欄…(記載なし)

下欄

パラヂン⁽⁵⁴⁾ 殺虫玉 三和為行

本口区向ヶ丘弥生町

(54) パラヂン…アパラヂン錠の略か。昭和十七・七・十七付「東京朝日新聞」の朝刊四面、金港化学工業アパラヂン錠の「広告」には「食欲は人一倍ありながら何故瘦せてゐるのです 月に一回虫下し」とある。

(55) 村岡應東…奥野久美子氏の調査によれば、村岡應東は帝展などで活躍した日本画家で、「大正十年帝國絵画番付」(東京文化財研究所ホームページ内の「明治大正期書画家番付データベース」)より、二〇二四年一月二十六日最終閲覧)には「帝展作家 東京」に分類されており、記載住所はこの大正十年時点では「小石川区水道端四五」、年齢は四十九歳となっている。住所は大正十二年の同番付でも変わっていない(同データベース、同日最終閲覧)が、その後転居したのだろう。ただ年齢的には昭和十四年時点で六十代後半であり、高齢の日本画家が圓玉の日記を清書する事情が推測できず、村岡應東が清書者かどうかは判断できない。なお、帙の川口松太郎の筆跡は、日記本文の筆跡とは異なり、彼が清書者というわけでもないようである。

(※十二月三十一日後、余白の八頁にメモがある。)

(※一頁)

本年一月より⁽⁵⁶⁾大阪時事新報に掲載なす錢屋五兵衛は田中が執筆なす事になりされど病氣を言ひ立て責任を忌避す 依て拙者が稿を記す事になしたれど そは田中が執筆するをめぐると それで病氣と(此間二三字不明)体を転じ原稿料の分前を取らんの意(此間二三字不明)なること彼れもなか／＼人がわるし大笑ひ／＼

稀代な人間

「兵藤正清は幼年の頃より亡妻に愛撫せ(此間二三字シミニヨリ不明)れ殆ど実子の如し、然るに亡妻の生前は勿論死後も佛

(※二頁)

前へ供ふべき花又は菓子など贈りし事もなきは実以て奇、怪、

相撲の俳句又狂歌俗曲

一年を廿日で暮す好い男⁽⁵⁷⁾

(56) 本年一月より(中略)大笑ひ／＼本日記の一月二十一日の記事・注参照。

(57) 一年を廿日で暮す好い男：『江戸川柳辞典』(「老年」の項、昭四三・五 東京堂出版)の「老年を廿日でくらすい、男」の解説には「よく知られる句。晴天十日を春夏の二回すればよかつた力士。今は十五日づつ六場所、合計九十日でくらすわけである。」と書いている。

角力取りにどこよくて惚れた稽古帰りの乱れ髪⁽⁵⁸⁾

押してけ押してけ⁽⁵⁹⁾三段目

相撲中継 アナ君の珍言

一瞬気合はず仕切直し簡短に塩をつかんでの

登場

(※三頁)

生糸⁽⁶⁰⁾ 一合李⁽⁶¹⁾

目方十六貫目⁽⁶²⁾ 目下千二百円位 但し輸出値段

八月中九月になつて千六百円程

坂元美代子を養子となすにつき浪上操を代人となしその調印を依頼せしに、彼れの

(58) 角力取りにどこよくて惚れた稽古帰りの乱れ髪：岐阜県の「郡上おどり」の歌詞「郡上甚句」の一節。「へ稽太鼓にふと目をさまし 明日はどの手でこいつあ投げてやる お相撲とりにはどこがようて惚れた 稽古がえりの乱れ髪 相撲にやなげられ女郎さんにやふられ どこで立つ瀬がわしが身は(後略)」とある。ホームページ「郡上どつと com (Gujo・地域資源アーカイブ)」より。二〇二四年一月八日最終閲覧)。

https://gujo.com/odori/lyrics/gujo_g_jink.html?c=anime

(59) 押してけ押してけ：囃子詞か。囃子詞とは「日本音楽の用語。歌をひきたてたり、活気づけたりするために、歌詞の本文に挿入された短いことばのこと。また、歌詞の字足らずを埋めて拍子を調節するために挿入された短いことばをも指す。」(『改訂新版 世界大百科事典』「囃子詞」の項、加納マリ執筆、平凡社、ジャパナレッジ版、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(60) 生糸：昭和十四・十二・二十三付「東京朝日新聞」朝刊三面には「日米通商条約廃棄を繞つて 座談会⑤ ニューヨーク本社支局発 生糸暴騰の影響深刻 米の靴下業者は困惑」の見出しがある。

(61) 合李：梱のこと。梱包した綿糸・生糸などの数量を表す単位の名。綿糸一梱は四百ポンドで一八一・四四キログラム、生糸一梱は九貫目で三三・七五キログラム。(『デジタル大辞泉』小学館、ジャパナレッジ版「梱」の項、二〇二四年一月八日最終閲覧)。

(62) 十六貫目：約六十キログラム。

書状に曰く自分は浪上家の相続人なるにより一応親族への報告なし 然して調印なすとの事、元来此事たるや親族ならでは証人たる事を得ざる性質のものに非ず、依て高橋英友氏及び早川鉄次を以て証人として届出、円満に解決を告ぐるに至れりめでたし〜

(※四頁)

八月十六日しらべ郵便

千五百五十円。六十七銭也

銀行預金ヲ加へテ

八千二百七十円九十四銭也

内九月五日東蓄ヨリ三千円引出ス

宗恩寺⁶³ 如燕氏⁶⁴ 墳墓

妻可宮々辛苦而助家計者

然瀧頭角者 長外交者

及露

(63) 宗恩寺…浄土真宗大谷派。(現)台東区西浅草一―六一七。宗恩寺には二代目桃川如燕のお墓がある。墓石の正面には「二世 桃川如燕」、墓石の右側面には「五世 麗々亭柳橋 大正十二年九月一日、四世 麗々亭柳橋 明治三十三年八月二十一日、一世 春錦亭柳桜 明治二十七年六月八日」、墓石の左側面には「昭和三年九月三十日建立 二世志主 桃川若燕」と刻まれている。この調査に関しては、宗恩寺住職の織田様のご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

(64) 如燕氏…二代目桃川如燕(一八六六―一九二九)は、「落語家麗々亭柳橋(本名斎藤文吉)の二男として生れた。柳橋には子供が三人あり、長男亀吉が後の四代目麗々亭柳橋、三男の久吉が五代目麗々亭柳橋という芸人一家の二男」である。「赤穂義士伝」を得意とし、通称「柳形如燕」と呼ばれた。(吉田修「第六章 桃川派列伝」(『東都講談師物語』平成二九・六、中央公論)。

(※五頁)

得富貴後者以短明不矣之女応為不○
是財 娶妻三種訣也

薰風陣々夢魂清 樹色暝朦日木明
露氣一天涼似水 石榴花落聽無聲

銀座二〇二、六九一〇、〇〇五二

福日 橋本善次⁶⁵ ○郡トシテ

支局長

(※六頁)

北支派遣軍 清水(栄) 部隊本部

篠村新太郎

七千円ニ対スル利月七十円也

(一割)

五月一日より東宝名人会へ出演、趣味漫談往復トモ車、首尾能十日間出演めでたし
七日目に椅子へ蹠躓左足ライタメ塗布薬ヲ用ヒ

(※七頁)

養生中 歩行甚難渋 六月上旬にいたるも癒えず

(65) 橋本善次…明治三六年生、昭和四年九大農政学科卒 福岡日日新聞社に入り同一五年、東京支社次長兼政経部長、同一八年、西日本新聞企画局次長、同二八年、取締役専任となる。(帝國秘密探偵社編「大衆人事録第十九版 西日本篇」昭三二、帝國秘密探偵社の要約)。

下谷区龍泉寺町⁶⁶三六二 青木宏之方

伯耆田 かつ⁶⁷

又ハ松田

丸ノ内造兵廠⁶⁸内勲章仕上ゲ部

七百七十七 川 倉⁶⁹

(※八頁)

六月十八日 郵貯しらべ

千三百六十四円二十六銭

(66) 下谷区龍泉寺町「龍泉寺町」といえば、樋口一葉が小説を書きながら、荒物・駄菓子

店を開店した場所である。伊藤氏貴、能地克宜編『樋口一葉詳細年表』（令和四・十、

勉誠出版）の「明治二十六年七月十七日（月曜日）」の一葉の日記には「浅草の竜泉寺

で間口二間奥行六間ほど、店は六畳、座敷が五畳と三畳、向きは南と北 小さい庭と、

その向こうに木立のある家（吉原の貸座敷「万年楼」の寮の庭／注記）があり、妹も良

いと言えはここに決めることにし、左隣の酒屋に頼んで帰宅。」と記されている。

(67) 伯耆田かつ・圓玉宅の家政婦。六月八日、十月十九日、十一月二十五日に既出。

(68) 造兵廠：旧日本陸海軍兵器廠に属した官庁の一つで、兵器・弾薬・戦闘用車両・艦船な

どの設計・製造・購買・検査・実験・修理などを担当していた役所および工場の総称。

(69) 川倉：一月二日以降、本日記に頻出する人物。

【補記】本翻刻・注釈の各月ごとの担当者は以下の通りである。ただし、翻刻・注釈ともに

全編を全員で検討し、注釈を補い合うなどした。

七月 奥野久美子／八月 中村健／九月 吉井美稀／十月 武田悠希／十一月 高橋圭一／

十二月（巻末メモ欄含む）松田忍／（参考資料・付表）『悟道軒日記帳』に記述された執筆

活動（抜粋） 中村健

（参考）『悟道軒日記帳』に記述された執筆活動（抜粋）

『悟道軒日記帳』は、講談執筆のことが断片的に記されている。そこで、書き講

談制作の実態を捉えるため、連載や出版に関する記述を抽出し、表形式でまとめ

た。

◇左記に表の各項目の説明を記した。

・月日―日記の日付

・日記に記述された内容―創作に関する日記の記述を抜粋した。

・活動内容―採録者が適宜キーワードを付与したもの。

・内容に関わる作品／雑誌・新聞・図書、新聞社、出版社名―日記の記述に関係す

るメディア名を記載した。連載名は作品名が確定した段階から記載している。

・関係する人物―主に記述に登場する人物名の姓を記載している。なお日記では、

各人物について姓のみ記されることが多く、推定される人物は次の通り。人物の詳

細は○内の注を参照してほしい。

石川―石川静三郎（六月二十二日注）

大宮―大宮伍三郎（十一月九日注）

志摩―志摩新太郎（六月十七日注）

田中―講釈師の田中巖（一月二十一日注）

南鶴―田辺南鶴（五月十二日注）

水谷―水谷青夢（二月一日注）

原田―原田徳次郎（七月一日注）

山根―山根真治郎（十二月二十三日注）

月日	日記に記述された内容	活動内容	内容に関わる作品/雑誌・新聞・図書・新聞社、出版社名	関係する人物
1月17日	大阪時事に原稿を送る	原稿送付	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	
1月22日	久々にて自ら筆を把り銭や五兵衛二席を認む	原稿執筆	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	
2月3日	田中氏より電話銭五（ママ）元稿の事	原稿内容	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	田中
2月3日	内外より金来る山根氏不在のよし申来る 始めて本稿こうせいする	原稿料	内外通信	山根
2月4日	田中氏細女原稿料持参	原稿料	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』の事か？	田中
2月9日	田中来る 銭五執筆ヲ依頼 原本ヲワタス	原稿執筆	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	田中
2月16日	大化の石川氏来訪、大阪名産雀ずしをおくらす	来訪	『大阪化粧品商報』	石川
2月24日	大化原稿料受取十一ヨリ十五マデ	原稿料	『大阪化粧品商報』	
3月7日	話より4円届ク	原稿料	「天龍乗切り始末」『話』7（4）1939年4月号の事か？	
3月9日	正午放送局文げいぶ松嶋へ宛原稿発送	原稿送付		松嶋
4月7日	田中妻女来ル大阪時事の稿料持参	原稿料	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	田中
4月22日	川倉氏久々にて来訪寄稿のはなし松平長七郎及び遠山の単行本ヲワタス	来訪		川倉（川合氏の事か？）
5月3日	来客水谷氏画幅持参	挿絵		水谷
5月8日	午前画人水谷氏来訪挿画の件	挿絵		水谷
5月8日	画人茅場氏来訪河北新聞挿画の件	挿絵	「大岡政談 後藤半四郎」『河北新報』	茅場哲雄
5月8日	田中來り大阪時事の稿料持参	原稿料	「豪商／銭屋五兵衛」『大阪時事新報』	田中
5月8日	朝日新聞ヨリシヤベリチン十円届ク	原稿料	朝日新聞社	
5月12日	南龍氏來り門人南鶴書林ヨリ依頼にて講談出版の件	出版		南龍／南鶴
5月15日	田辺南鶴氏来訪原稿之件	原稿執筆		南鶴
5月17日	内外通信 六円届ク	原稿料		
5月18日	川合氏ヨリ電話満州日々遠山ト確定	原稿執筆	「遠山左衛門尉」『満州日日新聞』の事か？	川合
5月26日	内外通信ヨリ六円オクリキタル（不審）	原稿料	内外通信	
5月29日	田中ヨリ電話福日新聞原稿の件／コレハ福日ヨリ僕ヲ名ザシニテ依頼スルトカ／新聞の事はまとまらぬ内はわからぬものなり	原稿依頼	『福岡日日新聞』	田中
6月9日	通信社々員池内祥三とか言へる人來訪原稿の件／依て田中へ此の事を報じ同氏ト相談なせと申しおく	原稿依頼		田中 池内祥三
6月10日	田中ヨリ福日の返書封入にて書状來ル福日は今暫く延引	原稿依頼	『福岡日日新聞』	田中
6月16日	博文館の嶋氏よりデンワ、長編講談出版の件 明日訪問せられる由	出版依頼	『長編講談』（博文館）の事か？	志摩
6月17日	博文館（嶋）志摩氏来訪	出版依頼	『長編講談』（博文館）の事か？	志摩
6月22日	大阪化粧品より送金二十五円 次に目下連載中の小録はこの稿を以て中止となり新に武張りしものを掲載するとか	原稿料 原稿内容	「赤穂義士」『大阪化粧品商報』	
6月23日	大化に目録を送る		『大阪化粧品商報』	
6月26日	田中來ル稿料持参五十円トル但大阪時事は終局マデ河北三十席分	原稿料	『大阪時事新報』『河北新報』	田中
7月1日	福日幕末七剣士ときまる（中略）福日副社長原田徳次郎氏同社勤務を辞セシヨシ（副社長）	原稿内容	「幕末七剣士」『福岡日日新聞』	原田
7月2日	田中來ル 福日ヲ依頼	原稿依頼	「幕末七剣士」『福岡日日新聞』	田中
7月6日	大化は十剣士と確定	原稿内容	『大阪化粧品商報』	
7月15日	大化と南陵氏へ	その他	『大阪化粧品商報』	
7月15日	内外通信へ原稿発送 是は例月の分	原稿送付	内外通信	
7月23日	大阪化粧品西村氏来訪 原稿の事／幕末十剣士ヲ十八烈士と訂正	原稿内容	『大阪化粧品商報』	西村
7月25日	田中福日の原稿料持参（三十席分）／筆墨代二十六円与フ／蕎麦トツテ馳走／田中福日の原稿料薄きに不満の様子／夜ソレについて書状を發ス	原稿料	幕末劍豪伝『福岡日日新聞』	田中
8月1日	山根氏ヨリ葉書 返書ヲ發ス	連絡	内外通信	山根
8月3日	蒙疆新聞社代理山根氏ヨリ五十席分送付（五十席）／原稿料來ル	原稿料	蒙疆新聞	山根

月日	日記に記述された内容	活動内容	内容に関わる作品/雑誌・新聞・図書、新聞社、出版社名	関係する人物
8月4日	山根氏へ受取証を發す	原稿料	内外通信	山根
8月4日	大化十剣士は幕末十八烈士と改題	原稿内容	『大阪化粧品商報』	
8月7日	午前十時新聞解剖へ原稿發送	原稿送付	新聞解剖	
8月7日	田中来り河北稿料(六十席) マデ持參三十円トル	原稿料	後藤半四郎	田中
8月8日	午前郵便局ヨリ川合氏おくりし稿料(四十五円)領収	原稿料	「遠山左衛門尉」『満州日日新聞』	川合
8月18日	福岡日日新聞(十六日付)の新聞到着(幕末劍豪伝)第三席	連絡	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	
8月23日	内外通信へ蒙疆新聞原稿出ス六十ヨリ七十マデ	原稿送付	蒙疆新聞	
8月28日	画人水谷氏来る	來訪		水谷
8月29日	内外の短編原稿料領収(六円)	原稿料	内外通信	
8月30日	田中のもとへ講談クラブヲおくる	連絡	「劍豪島田見山」『講談倶楽部』増刊	田中
9月22日	大化より稿料届ク直ニ受取り領収証を發す	原稿料	『大阪化粧品商報』	
9月23日	本日大阪石川氏へ昨日貰ひし羊かんをおくる(送料五十五銭)	おつきあい	『大阪化粧品商報』	石川
9月25日	田中福日の稿料持參	原稿料	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	田中
9月27日	駒井氏來訪、右円氏來り南鶴來ル 原稿ヲワタス	原稿送付		南鶴
9月28日	内外通信の稿料六円トル	原稿料	内外通信	
9月29日	田中河北の稿料持參	原稿料	「大岡政談 後藤半四郎」『河北新報』	田中
10月11日	大阪石川氏ヨリ松茸ヲオクル 早川へ裾分け	おつきあい	『大阪化粧品商報』	石川
10月13日	南鶴氏來り越後伝吉キリヌキをワタス三十円ウケトル	原稿料	「越後伝吉」『名古屋新聞』	南鶴
10月15日	南鶴のもとへ原稿おくる	原稿送付		南鶴
10月20日	水谷氏來り雑談 川口へ紹介の名刺ヲ与フ	おつきあい		水谷
10月21日	新聞文藝社ヨリ稿料は月末送るとの事	原稿料	新聞文藝	
10月21日	山根氏ヨリ伊達原稿料送付五十一より百マデ	原稿料	内外通信もしくは蒙疆新聞のことか?	山根
10月24日	大阪化粧品石川静三郎氏来る	編集者	『大阪化粧品商報』	石川
10月26日	同盟通信ヨリ新春の原稿依頼あり	原稿依頼	同盟通信	
10月27日	伊達原稿十席速達にて發送	原稿送付	内外通信もしくは蒙疆新聞か?	
10月27日	正午頃田中福日原稿料持參	原稿料	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	田中
10月30日	内外通信講料到着	原稿料	内外通信	
10月30日	田中河北の稿料持參	原稿料	「大岡政談 後藤半四郎」『河北新報』	田中
10月31日	新聞文藝九月分稿料いまだ不着	原稿料	『新聞文藝』	
11月5日	福日去月廿七日以後講談掲載セズ依て 田中をしてその理由を支局に問い合わせ	原稿掲載	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	田中
11月8日	同盟通信へ原稿四種發送	原稿送付	同盟通信	
11月9日	夜中田中より電話 名古屋新聞大宮氏ヨリ書状ニテ工業新聞とか言える新聞発行につき原稿依頼	原稿依頼	名古屋新聞、『名古屋工業新聞』	田中 大宮
11月10日	夜田中ヨリ電話 名古屋工業新聞のハ一日一円五十銭トハ安イヘ	原稿料	『名古屋工業新聞』	田中
11月11日	田中来ル 工業新聞挿絵につき水谷方へ行く	編集	『名古屋工業新聞』	田中
11月12日	田中よりの手紙 水谷挿絵承知画料一回(ヘイ)	原稿料・画料	『名古屋工業新聞』	田中
11月15日	内外通信へ原稿發送	原稿送付	内外通信	
11月20日	内外通信より六円送リ來ル 直に受取	原稿料	内外通信	
11月21日	新聞同盟春の原稿料は本日送附スルヨシ 田中のはがきに依る	原稿料	同盟通信(同盟通信)	田中
11月21日	名古屋工業新聞発行本朝届ク 幕末十剣士挿絵は水谷青夢	連絡	「幕末十剣士」『名古屋工業新聞』	
11月22日	大化(廿一ヨリ廿五マデ)、同盟、落語四種 原稿料到着 大化廿五円同盟三十二円也 直に領収書を發行する。	原稿料	『大阪化粧品商報』同盟通信	
11月25日	田中福日原稿料持參	原稿料	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	田中
11月28日	福日本日より又々掲載(上田馬之助)	連絡	「幕末劍豪伝」『福岡日日新聞』	
12月7日	田中来り稿料持參	原稿料		田中
12月7日	新聞文藝より稿料届ク	原稿料	新聞文藝	
12月21日	内外ヨリ六円オクリキタル	原稿料	内外通信	

月日	日記に記述された内容	活動内容	内容に関わる作品/雑誌・新聞・図書、新聞社、出版社名	関係する人物
12月21日	田中来ル 河北原稿二十円写真ヲワタス	原稿料	「大岡政談 後藤半四郎」『河北新報』	田中
12月22日	内外原稿料六円ウケトリ	原稿料	内外通信	
12月23日	内外通信（山根氏）宛にて伊達 五十一ヨリ六十マデおくる	原稿送付	内外通信	山根
12月26日	福日稿料ウケトリ コレにておしまひ	原稿料	「幕末剣豪伝」『福岡日日新聞』	
12月27日	大化原稿料届ク	原稿料	「幕末十八烈士」『大阪化粧品新報』	
12月31日 終了後の 頁	本年一月より大阪時事新報に掲載なす錢谷五兵衛は田中が執筆なす事になりけれど 病気を言ひ立て責任を忌避す 依て拙者が稿を起す事になしたれど そは田中が執筆するをめんどうと それで病気と（此写二三字不明）体を転じ原稿料の分前を取らんの意（此写二三字不明）なること 彼れもなか、人がわるし 大笑ひ、	原稿作成	「豪商／錢屋五兵衛」『大阪時事新報』	田中